

觀音寺遺跡(IV)

道路改築事業(徳島環状線国府工区)関連埋蔵文化財発掘調査報告書

〈第3分冊 木簡編〉

2 0 0 7

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

觀音寺遺跡(IV)

道路改築事業(徳島環状線国府工区)関連埋蔵文化財発掘調査報告書

《第3分冊 木簡編》

2 0 0 7

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター



勘籍木簡（201号）出土状況（南西から撮影）



勘籍木簡（201号）出土状況（南東から撮影）



148号木簡出土状況（西から撮影）



178号木簡出土状況（西から撮影）



201号（裏2/5）



201号（表2/5）



113号（表1/1）



93号（表2/3）



114号（表1/2）



190号（表1/1）



141号（表1/1）



149号（表1/1）



203号（表3/4）



191号（表1/1）



147号（表1/1）



193号（表1/1）



144号（表1/1）



186号（表1/1）



161号（表1/1）



211号（表1/1）



148号（表1/1）



187号（表1/1）



185号（表1/1）



188号（表3/4）

175号（表1/1）

102号 (表1/1)



214号 (表1/1)



184号 (表1/1)



162号 (表1/1)



134号 (表1/1)



193号 (表1/1)



180号 (表1/1)



215号 (表1/1)



140号 (表1/1)



200号 (表3/4)



137号（表1/1）



183号（裏4/5）



183号（表4/5）



133号（裏1/1）



151号（表2/3）



182号（表1/1）



206号（表1/1）



202号（表3/4）



178号（裏3/4）



178号（表3/4）



121号（表1/1）



173号（表1/1）



150号（表1/1）



124号（表2/3）



165号（表1/1）



92号（裏1/1）



92号（表1/1）



91号（表1/1）



87号（表2/3）



87号（表2/3）



105号（表1/1）



89号（1/1）



88号（表2/3）



凡例

一 木簡の番号は報告書によつて新たに割り振つたものを使用している。番号を付ける際の基準は以下の通りである。

① 自然流路 (SR三〇〇一) 内の対応層位のうち、より新しい年代から。

② 自然流路 (SR四〇〇一・SR五〇〇一) 出土のものについては、SR二〇〇一との層位の時期的な対応関係から。

二 木簡の积文には以下のような書式を用いた。法量図を「長さ×幅×厚み」で积文のドに表し、括弧()は本来の形状を留めていない部分の法量であることを示す。

雁式番号は奈良文化財研究所のものを用い、三桁の数字で以下の通りに記す。

○ 一型式 短冊形

○ 五型式 短冊形で側面に穴を穿つたもの。

○ 九型式 一端が方頭で、他端は折損・腐食で原形の失われたもの。

○ 二型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいたもの。方頭、主頭など種々の作り方がある。

○ 三・型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいたもの。

○ 三・型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいたが、他端は折損したもの。

○ 四九型式 長方形の材の一端を羽子板の柄状にしているが、他端は折損・腐食などによって原形が失われたもの。

○ 五一型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

○ 五九型式 長方形の材の一端を尖らせているが、他端は折損・腐食で原形の失われたもの。

○ 六一型式 用途未詳の木製品に墨書きのあるもの。

○ 六五型式 折損・腐食その他によつて原形の判明しないもの。

○ 八一型式 折損・腐食その他のによって原形の判明しないもの。

三 积文に用いた符号は以下の通りである。

「 」 木簡の上端ならびに下端が原形を留めていることを示す。

< 木簡の上端・下端などに切り込みのあることを示す。

。 穿孔のあることを示す。

△△ 捂消された文字であるが、字画の明らかな場合に限り原字の左傍に付した。

■■ 捂消により判読の困難なもの。

□□ 欠損文字のうち字数が推定できるもの。

× 欠損文字のうち字数が数えられないもの。

一一 異筆、追筆。

△△ 合点。

△△ 表面の剥離により字画の存在が不明確なもの。

× 前後に文字の続くことが内容上推定されるが、折損などにより文字が失われているもの。

△△ 本簡に裏表のある場合、その区別を示す。

〔 〕 校訂に関する註で、原則として积文の右傍らに付し、本文に置き換えるべき文字を含む場合。

カ 筆者が加えた註で疑問の残るもの。

四 木簡の実測図には、大橋の観察により木簡表面の「ケズリ」や「ワリ」といった考古学的情報を優先して書き入れた。

五 実測図は基本的に $1/2$ の縮尺である。それ以外の縮尺は $1/3$ 、 $1/4$ で、個々にスケールを付けてある。

六 図版の木簡赤外線写真は、文字が読めるものについては原寸大もしくは縮尺 $2/3$ とした。文字部分のみ切り取ったものは原寸大とした。文字が不明瞭で読みきらなかったものについては、縮尺 $1/2$ または $1/4$ とした。

七 写真的撮影は、発掘時の状況については調査時の各担当が、木簡については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の中村一郎氏が撮影した。なお、巻頭図版は保存処理前の状態を、赤外線写真図版は保存処理後の状態を撮影したものである。

八 本書の執筆と編集は大橋育順が担当した。但し、「II-12 出土木簡の积文と内容」は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所への「徳島市觀音寺遺跡・敷地遺跡（阿波國府推定地）出土木簡の総合的研究業務委託」の成果として、都城発掘調査部史料研究室 渡辺晃宏氏の記述とともに大橋が作成し、京都教育大学名誉教授 和田 萬氏に加筆、監修していただいたものである。

本文目次

I 木簡出土遺物の概要	1
一 自然流路 (SR三〇〇一) (第三四図)	2
二 自然流路 (SR四〇〇一) (第七四図)	2
三 自然流路 (SR五〇〇一) (第五六図)	2
四 木簡の出土状況	3
II 出土木簡の観察と積文	6
一 出土木簡の概要	6
二 出土木簡の積文と内容	6
三 その他	67
III まとめ	70
一 観音寺遺跡出土木簡の年代について	70
二 木簡の形態について	71

挿図目次

第四九八図	自然流路 (SR.二〇〇一) の地形とV層出土木簡分布図	4
第四九九図	自然流路 (SR.二〇〇一) Ⅲ層・IV層出土木簡分布図	5
第五〇〇図	木簡実測図① (八七号・九一号)	8
第五〇一図	木簡実測図② (九三号・九九号)	12
第五〇二図	木簡実測図③ (一〇〇号・一一〇号)	16
第五〇三図	木簡実測図④ (一二一号・一二〇号)	20
第五〇四図	木簡実測図⑤ (一二二号・一三二号)	24
第五〇五図	木簡実測図⑥ (一三二号・一四〇号)	28
第五〇六図	木簡実測図⑦ (一四一号・一五一号)	34
第五〇七図	木簡実測図⑧ (一五一号・一六〇号)	38
第五〇八図	木簡実測図⑨ (一六一号・一七一号)	42
第五〇九図	木簡実測図⑩ (一七二号・一七八号)	46
第五一〇図	木簡実測図⑪ (一七九号・一八七号)	50
第五一一図	木簡実測図⑫ (一八八号・一〇〇号)	54
第五一二図	木簡実測図⑬ (一一〇一号・一〇八号)	60
第五一三図	木簡実測図⑭ (一一〇三号・一〇九号・一二五号)	64
第五一四図	その他実測図	68
第五一五図	木簡の型式別組成	72

表目次

表一二	各層位の木簡出土数	79
表一三	木簡型式別出土数	74
表一四	木簡	71
表一五	その他	6

図版目次

・卷頭カラ一		
卷頭図版四	勘籍木簡 (二〇二号) 出土状況 (南西から撮影)	
卷頭図版五	一四八号木簡出土状況 (西から撮影)	
卷頭図版六	一七八号木簡出土状況 (西から撮影)	
卷頭図版七	木簡	
卷頭図版八	木簡	
卷頭図版九	木簡	
卷頭図版十	木簡	
卷頭図版十一	木簡	
卷頭図版十二	木簡	
卷頭図版十三	木簡	
卷頭図版十四	木簡	
卷頭図版十五	木簡	
卷頭図版十六	木簡	

・赤外線写真図版

図版八二	木簡（八七号～九二号）	9
図版八三	木簡（九三号～九九号）	13
図版八四	木簡（一〇〇号～一一号）	17
図版八五	木簡（一二二号～一二〇号）	21
図版八六	木簡（一二二号～一三一号）	25
図版八七	木簡（一二三号～一四〇号）	29
図版八八	木簡（一四一号～一五一号）	35
図版八九	木簡（一五二号～一六〇号）	39
図版九〇	木簡（一六一号～一七一号）	43
図版九一	木簡（一七二号～一七八号）	47
図版九二	木簡（一七九号～一八七号）	51
図版九三	木簡（一八八号～二〇〇号）	55
図版九四	木簡（二〇一号～二〇八号）	61
図版九五	木簡（二〇二号～二〇九号～一二五号）	65
図版九六	その他	69

・付図

二〇二号木簡赤外線写真（原寸大）

I 木簡出土遺構の概要

一 自然流路 (SR三〇〇一) (第七図)

位置と規模 大グリッドLoc.F-1、中グリッドY-S-I-III・IVにまたがる、幅約九〇mの流域をもつた自然流路である。

形状 東西幅六〇mで設定された調査区に対して、自然流路 (SR三〇〇一) は南東から北西方向に流域をもつ。中グリッドY-IV、小グリッドS-T-1-7において、南東から北西へのSR三〇〇一の南岸の肩を確認した。一方北岸は中グリッドS-I-III・IV、小グリッドQ-S-17-9において肩を検出した。

層位の設定

自然流路 (SR三〇〇一) は複数の年度にわたって分割調査を行った結果、流路内の複雑な堆積層を細部にわたって年代を対応させることができなかった。そのため、鍵になる層と出土遺物を手がかりに、大きくI-I'の九層に再構成した。特に二〇〇一年度以降は周辺住宅への影響を考慮して、標高一・五m付近の粗砂層 (V層) 以下への掘削が制限されたため、V層に対応するのは二〇〇〇年度一区に限定される。

基本的な層序は、最も広い面積を調査した二〇〇〇年度一区の層位の観察結果を重視した。それ以後の年度の調査は、この結果を基に層の対

応關係の把握を行った。一九九八年度一区は他の調査地点と少し距離があつたため層位の対応は困難であったが、二〇〇七年度の調査の結果によつて明確になった。鍵となる層位は木製品を多く含むIII層上部の砂層、シルトと細砂が互層に堆積し、自然木などの有機物を多く含むVI層、層厚が五〇cm以上の粗砂からなるV層である。

ここでは各層位の観察結果から、SR三〇〇一の各段階での様相を下層から順に概観する。まず最下層のV層は、二〇〇〇年度一区のみで掘削した層である。標高一・五m以下に存在する細砂及び粘質土からなる遺物は少ないが、「里」表記の木簡が出土している。V層は、すべての年度の調査区から検出されている。層厚〇・五～一mの粗砂層である。粒子の大きな粗砂が厚く堆積するという状況から、この当時の自然流路 (SR三〇〇一) は水量が多く、幅約九〇mの流域のほとんどに流水が及んでいたものとみられる。比較的大きな遺物が粗砂に埋もれた状態で出土し、土器片には著しい摩滅がみられた。第六図 (分冊) の柱状図をみると、約一m堆積した部分もある。上面ではかなりの起伏があり、南区の中央部の南東から北西方向に (第六図の⑤と①) に隆起した部分がみられる。V層はSR三〇〇一の南東部の一九九八年度一区のみで確認できた (第四四七図)。主にシルト層で構成されている。VI層はシルトと細砂が互層に堆積する。平面的には五〇cm程の起伏があり、遺物をほとんど含しない。VI層の上に約三〇cmの厚さで堆積しているが、南北区北東部 (第六図の⑥と②) では特に標高二・五mより高い位置に堆積している。木簡を多く含むV層が堆積した時期には、流路の北岸または中洲として水面上に位置していたと推測できる。この時期のSR三〇〇一はシルトと細砂が短いスパンで堆積することから、流量が

不安定な時期であったと推測される。SR三〇〇一の南半部分の調査時

(一〇〇四・一〇〇五年度)に、VI層上面の起伏を等高線で表した(第

四八図の上)。その結果、SR三〇〇一の南岸の下場はさ一IV・A-11からさ一III・D-20への方向でSR三〇〇一の検出時の南岸の方向と

同一であった。またさ一IV・E-17からさ一IV・E-11で東西方向に約

二五m、幅約一〇mの中洲状の高まり(中洲A)と、さ一III・E-20からさ一IV・F-4でも同様の高まりを検出した(中洲B)。特に前者は

調査区外の東側へ延びているため、現時点では、V層段階の流路は南北

からの流れと、東からの流れが、合流していたのではないかと考えられ

る。なお、さ一IV・C-5周辺においてVI層の堆積が薄く、V層の堆積

が厚い部分がみられた。V層は木簡が最も多く出土した層である。細砂

混じりのシルトが主に堆積する。この段階では、流路内に複数の中洲状

の高まりが存在することから、水量は少なく、VI層段階に形成された起伏が中洲となり、その間を縫うように水が流れると推測できる。IV層段

階では粒子の細かい粘質のシルトが堆積する。VI層によつてできた中洲

は埋没していくが、第六図の柱状図⑤や⑥、⑦のように、北東部から北

岸では堆積がみられず、流路の中央からやや南側に厚く堆積している。

流れもV層に比べて安定していたと推測できる。Ⅲ層は、ほぼ全域に堆

積しているが、南東側に厚く、その他は薄い傾向がみられる。I・II層

はSR三〇〇一が埋没した後の堆積層で、遺物はほとんど出土しない。

現在の舌洗川に隣接した部分では、自然流路の堆積がみられたが、それ

以外の大部は低湿地又は水田としての土地利用が考えられる。上層は

平均して約一mの盛土によって、現地盤の標高は七~八mになつてい

二 自然流路 (SR四〇〇一) (第三四図)

位置と規模 大グリッドLoc.E-1、中グリッドe-I-III・IVにまたがる、幅約七m、調査区内での延長約七〇mの自然流路である。

形状 東西幅六〇mで設定された調査区に対して、自然流路 (SR四〇〇一)は南東から北西方向に直線的に流れる。さ一IV・J-1からe-I-III・P-9の方向を軸にしている。

三 自然流路 (SR五〇〇一) (第五六図)

位置と規模 SR四〇〇一とはほぼ同じ位置であるが、大グリッドLoc.F・G-1、中グリッドe・a-I-III・IVにまたがる幅約三〇mの自然流路である。調査区内での延長は約九〇mである。

形状 東西幅六〇mで設定された調査区に対して、自然流路 (SR五〇〇一)は南東から北西方向に直線的に流れる。自然流路 (SR四〇〇一)と同方向を軸に、東はe-I-IV・J-3から西はe-I-III・B-8にまたがる。

四 木簡の出土状況

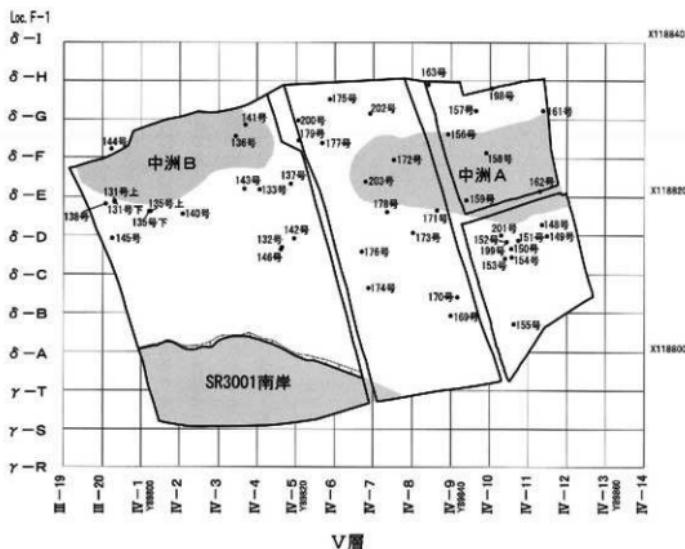
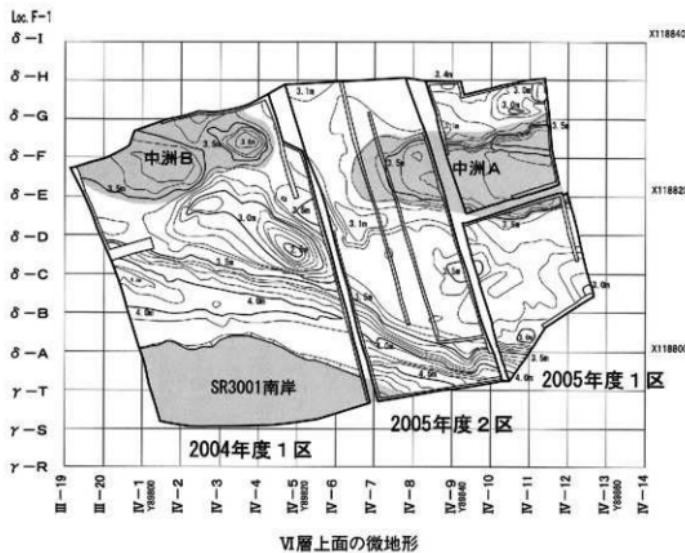
出土した木簡は、調査時に木簡と確認できたものについては、出土位置を座標で記録している（第三四・五六・一二三・一二七・一六二・二六六・一七五・一七五・四九八・四九九図・表一四）。特に、一〇〇四年度と

一〇〇五年度に調査したSR二〇〇一の南岸では、木簡が多く出土したV層を取り除いた時点のVI層上面において、流路内の微地形を記録した（第四九八図の上）。ここでは、各層ごとに木簡の出土位置を地形図をもとに記述する。まず、VI層上面の地形をみると、調査区の南北隣にSR二〇〇一の南岸の肩がみられ、南西から北東方向への傾斜が確認できる。一方調査区北東部のE-17-11にかけての部分では、東西方向へのびる幅約10mの中洲状の微高地（中洲A）がみられる。これによつてSR二〇〇一は南東方向からの流れと東からの流れが合流していく可能性が考えられる。さらに西側のE-10からF-4にかけても東西方向の微高地（中洲B）がみられた。この二ヶ所の微高地が埋没後に二次的な漫食を受けていないと仮定すると、V層が堆積した時期にはこのようないくつかの部分的な微高地の間を、比較的小さな流れが流路を変化させながら流れていたと推測できる。

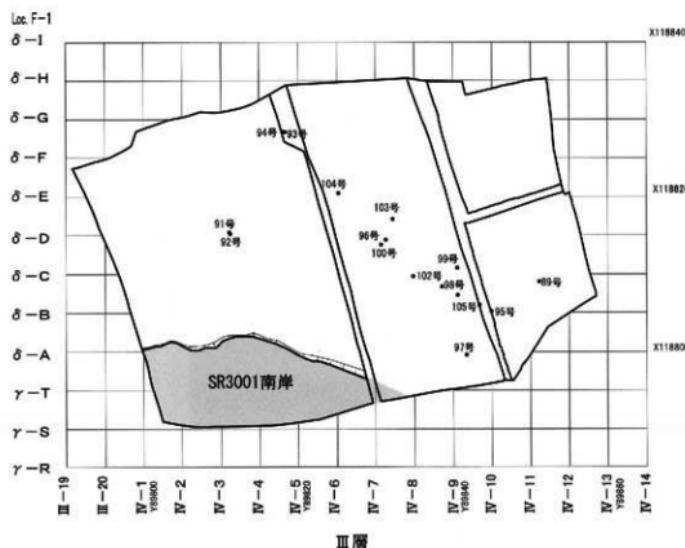
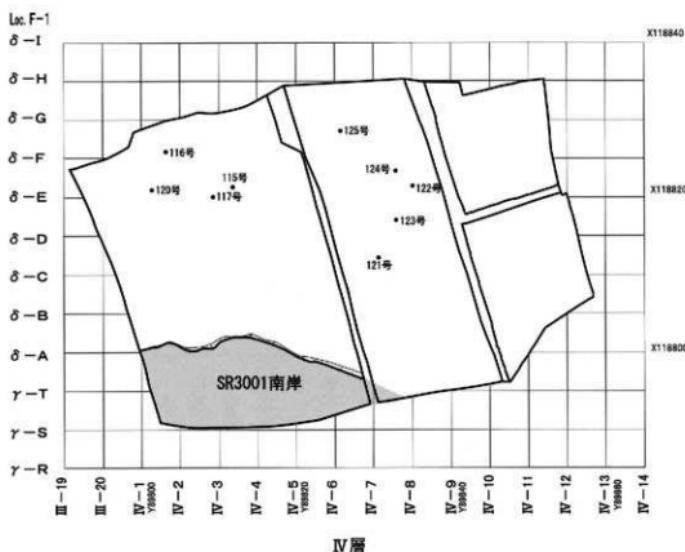
V層段階では、木簡は南岸の傾斜部分ではほとんど出土していないが、流路内の広範囲で出土している（第四九八図の下）。その中でも中洲Aの周辺には木簡の分布が多くみられる。とりわけ勘籍木簡（二〇一号）を含む九点からなる集中部が中洲の南側にみられるのは注目される。また西の中洲B周辺にも集中部がみられる。このことから、これらの木簡が主に南東方向からの流れによって運ばれてきたもの、中洲から

投棄されたものという一つの可能性が考えられる。しかし、多くの木簡の出土状況が散発的であることから、投棄地点は距離の離れた上流であると推測される。また、中洲Aの北側にも木簡が出土しているため、東からの流れにも木簡は含まれていたと考えられる。

IV層が堆積した時期には中洲A・Bはほとんど埋没していたことが、断面の観察で確認された。木簡も中洲上から出土している（第四九九図の上）。この時期の流れを平面的にとらえられなかつたが、主に南東方向からの流れであったと推定される。またⅤ層段階では、木簡の分布が南西から北西方向に細長く分布していることから、かなり流れの幅は狭くなっていたのではないかと考えられる（第四九九図の下）。



第498図 自然流路 (SR3001) の地形とV層出土木簡分布図



第499図 自然流路（SR3001）Ⅲ層・Ⅳ層出土木簡分布図

II 出土木簡の観察と釈文

一 出土木簡の概要

近世以降	2
II層	2
III層	21
IV層	19
V層	73
VI層	1
VII層	5
VIII層	1
IX層	5
合計	129

出土した木簡は、合計一

（南）のように記す。

二九点である。この中の一二五点はSR二〇〇一から出土し、二点がSR四〇〇二、一点がSR五〇〇一からである。先の国道一九二号南環状道路部分で出土し

た木簡が八六点であつたため、木簡番号は八七号木簡から二二五号木簡になる。各層の出土数は表二の通りであるが、SR四〇〇一・SR五〇〇一から出土した木簡は、時期的にV層に対応するものとして扱つた。赤外線写真で墨痕を確認したが文字と判断しなかつたもの、形状や表面の割りが木簡と共通しているが、墨痕が確認されなかつたものについては、その他の項目に分類した。各層位の年代は共伴遺物から判断し、II層は中世以降、III層は一〇世紀前半、一一世紀初頭、IV層は九世紀後半、一〇世紀前半、V層は八世紀後半、九世紀前半、VI層は八世紀半ば、VII層は八世紀第二四半期、VIII・IX層は八世紀前半以前の年代を想定し

二 出土木簡の釈文と内容

以下、八七号木簡から二二五号木簡について釈文を掲げ、簡単な説明を加えるが、その際に関連して国道・九二号南環状道路から出土した八六点にも言及するところがある。一号木簡から八五五号木簡については、二〇〇一年に「觀音寺遺跡」（觀音寺遺跡木簡篇）（勧徳島県埋蔵文化財センター）として公刊されたので、それらの木簡は一号木簡

また凡例にも示されているように、八七号木簡から二二五号木簡は保存処理に際し、事前と事後に和田 耕氏・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の都城発掘調査部史料研究室・当センター職員で、釈文および内容の再検討を行つた。本稿は、その際の渡辺晃宏氏の記述とともに大橋が本文を作成し、和田氏が加筆、監修したものである。なお、二〇一号木簡（勘篠木簡）の解説は、全て和田氏による。

なお検討会の参加者は次の諸氏である（敬称略）。

京都教育大学名誉教授 和田 耕

京都府立考古学研究所 渡辺晃宏、馬場 基、市 大樹、山本

崇、浅野啓介

（勧徳島県埋蔵文化財センター） 藤川智之、服部 靖、大橋育順

八七号木簡

「国府小三かんおんじ」
「稲飯昭代」
「国府小三かんおんじ」
「いなし」

一四八×五四×六 ○一一

完形。文字面は両面とも、ほぼ平坦。上端中央部に穿孔がある。学校での水泳授業時に使用する「命札」と呼ばれるものである。孔に紐を通して持ち運び、遊泳中はブールサイドに立てかけて遊泳中であること示す。学校名、学年、名前を両面に書き、毎年各1回で作成した。裏面の「いなし」は「稲飯」の意。「国府小」は、観音寺遺跡の所在する南環状道路の東約1・5kmに所在する徳島市立の小学校（徳島市国府町中）である。「かんおんじ」は集落名「観音寺」。昭和三十代のもので、発掘調査で遺物として取り上げられた最新の木簡である。現代の舌洗川の堆積層から出土。

八九号木簡

□ □ □ □ (表面)
□ □ □ □ 「一 (左側面)
□ □ □ □ [] (裏面)
□ □ □ [] (右側面)

(九五)×八×八 ○六一

小型の角塔婆状木製品である。上部に二段の切り込みがあり、一つ目の切り込みの上部に一文字、一つ目と二つ目の切り込みの間に一文字、二つ目の切り込みの下部に二文字程度の墨痕がある。表面は上部の一文字は梵字、下部の二文字は漢字とみられる。裏面木尾は「人」の可能性がある。また、表面末尾は三文字で「[口]十一」の可能性もある。木簡の下端は欠損している。II層出土の木簡。

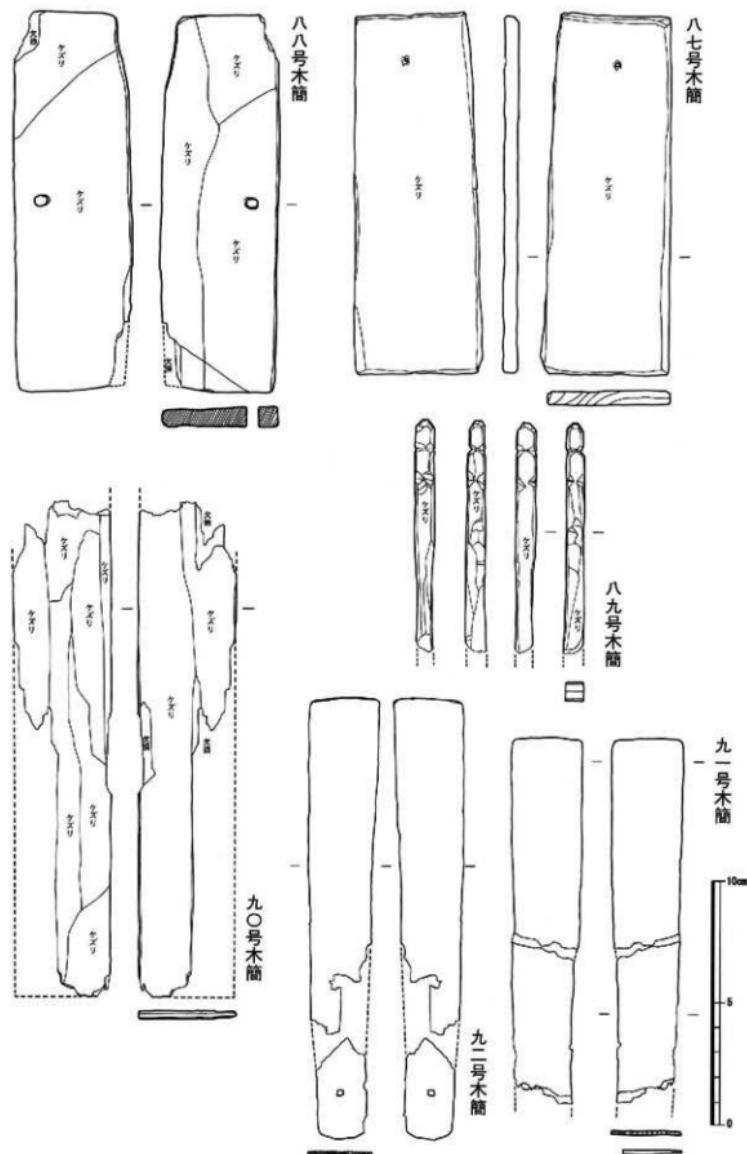
八八号木簡
(五五)×四八×八 ○八一
「阿波國名□□國府村大□□□」
「□□」

一四八×五四×六 ○一一

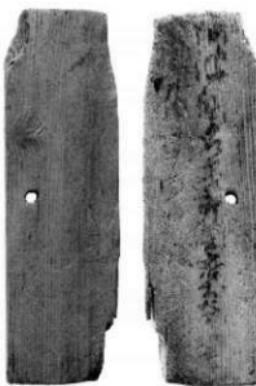
分厚い板に記された木簡。四周削りだが、右辺上部と左辺下部に僅かに欠損がある。左辺上部がやや細くなっているが、原形を留めるとみられる。中央部右寄りに穿孔が一つあるが、木簡の用途に伴うものか否か

は不詳。木簡としては大きさの割に異例に分厚く、出土状況や保存状況からも古代の木簡ではない可能性が高い。「国府村」は遺跡近傍の村名であり、近世から近代にかけての遺物と考えられる。「行目」「大」以下は地名、「一行目は字数は定めなかつたが、人名の可能性が考えられる。現代の舌洗川の堆積層から出土。

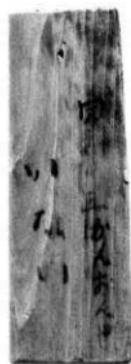
第五〇〇図 木簡実測図①



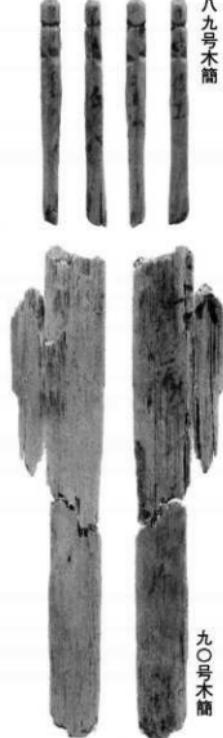
圖版八二



八八号木簡



八七号木簡



八九号木簡



九二号木簡

九〇号木簡



(一〇四)×四一×二〇八

・「六月十六日三斗下三升食米□□

(一八三)×一九×一〇六

三片が接合する。上端は折れ、右辺の大部分は割れているが、下端と左辺は削りにより原形を留める。やや小振りの文字で記されるが難読はできない。II層出土の木簡。

九一号木簡と同一の檜扇を構成する骨材の両面に墨書きがある。四片からなり、うち二片が接合する。下端部に、骨材を継じるための小穴を穿つ。III層出土の木簡。

九一号木簡



(一四六)×二九×一〇六一

〔勘定草カ〕
〔勘定草カ〕

〔書生安養教主〕

一二五×六七×七〇一

本造跡で出土した墨書きのない檜扇と比較して、薄子で幅広のものに墨書きしたもの。中央部で折れて二片が接続するが、下端は欠損。次の九二号木簡にも、「物マ望丸」がみえている。「一〇世紀前半」「一世紀初頭の阿波国衙の官人とみられる。檜扇の用途の一端を示す。阿波国における物部姓は、一六一号木簡に名方郡櫻間郷の「物マ△嶋」、海馬郷（阿波國那賀郡か）に「物部首魚万」（奈良国立文化財研究所、一九八七年「平城宮発掘調査出土木簡概報」）、六貢下段、阿波郡秋月郷に「物マ小鹿」（木簡学会、一九九二「木簡研究」一四号、一三四頁）、阿波郡高鄉郷に「物マ」（木簡学会、一九九八「木簡研究」二〇号、三三頁）がみえている。III層出土の木簡。

九二号木簡

・「望丸物マ望丸

九三号木簡

下端と左辺は削りで整形されているが、上端は一次的切断か。右辺に削りの痕跡はみられない。下端部が曲線を呈しているので、曲物の底板など転用材の可能性もある。大型の文書木簡の下端部の断片とみられる。中央から派遣された某省の省掌と国衙の書生が、何らかの勘査作業を実施したことを示すものか。一四号木簡に、名東郡の人である「安曇羅見」がみえる。名東郡は国衙の所在地であったから、同郡の白丁課役の氏が国衙の書生として任用されていた可能性もある。III層出土の木簡。

九四号木簡

「」 「」

(五五)×一八×三 ○二九

一片が接合する。上端と左右両端は削り、下端は折れている。上部に切り込みがあり、付札である。Ⅲ層出土の木簡。

九五号木簡

・ 
□ 

(一七四)×(一)×五 ○八

上下両端は折れ、左辺は削り。右辺は割れているが、文字の一部がみえるため、木簡を割成したものと考えられる。Ⅲ層出土の木簡。

九六号木簡

□ □ □

(五+)×一五×一 ○六一

檜扇の骨の断片に墨書きがある。上下両端が折れている。僅かな墨痕があるが訛説は出来ない。Ⅲ層出土の木簡。

九九号木簡

□ 

(一)三五)×一三×五 ○八一

一片が接合する。上下両端は折れ、左右両端は削りによる。両面ともに、縦に長い削りによって整形される。中央部に「小」のような字画が

九七号木簡

□ □ 反 □

(一九四)×(一三)×一 ○八一

上下両端折れ。左辺削り。右辺削りか。一片接続。「文字目は「返」「互」など、三文字目は「枝」「板」「枚」など、六文字目は「枝」「板」「枚」「被」などの可能性がある。いずれにしても、同じ文字が繰り返し記されているようであり、習書木簡の可能性が高い。Ⅲ層出土の木簡。

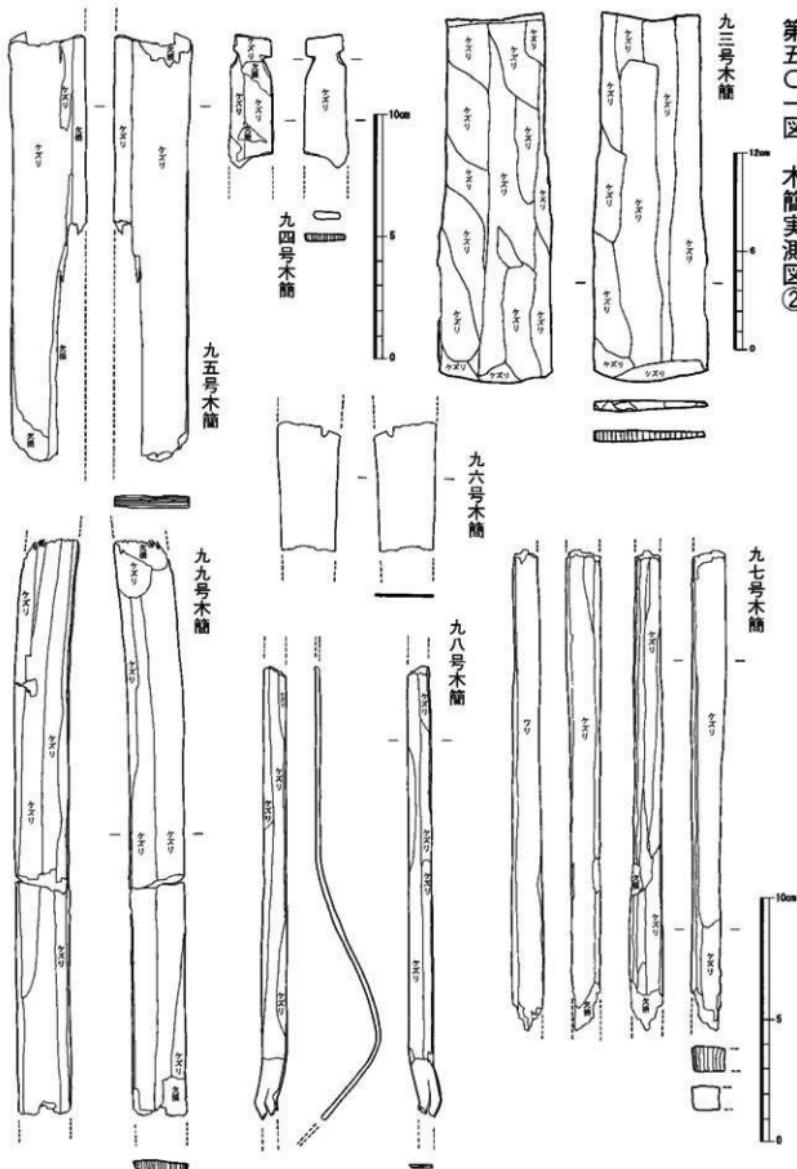
九八号木簡

□ □ 
□

(一〇)×一九六×二 ○八一

一片が接合する。上下両端が折れ、左右両辺は一 次的に削られている。両面ともに縦長の削り面で構成される。薄い横材木簡の断片である。左から、行目の文字は「役」「伎」などの可能性がある。Ⅲ層出土の木簡。

第五〇一図 木簡実測図②



九三号木簡

九三号木簡拡大



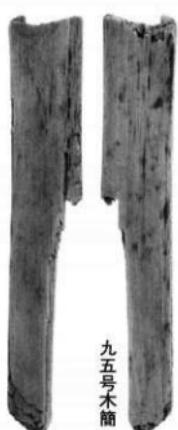
九四号木簡

九六号木簡

九七号木簡

九八号木簡

九九号木簡



図版八三

木簡。 残るが、「北」「心」などの可能性もある。三文字目は「迎」、四文字目は「奉」「來」などの可能性がある。裏面には墨痕がない。且屬出土の

一〇二号木簡

「加毛得
〔繼カ〕」

(八七)×一九×五 ○三九

上端と左右両辺は削り、下端は折れ。上端には両側からの切り込みがある。文字面には縦長の削り面がみられるが、施され、付札の形状を呈する。文字面には縦長の削り面がみられるが、

100
總

6

(一一六)×一八×三〇五九

國名方郡に質茂（刊本「和名類聚抄」では加毛）郷がある。皿屋出土の木簡。

ト端は折れているが、左右両面は削り、下端は左右からの削りにより山形に尖らせる。文字面は細かな削り面によって整形されている。わずかに墨痕がみられるが觀説はできない。三層出土の木簡。

一〇三号木簡

一四二

三

1

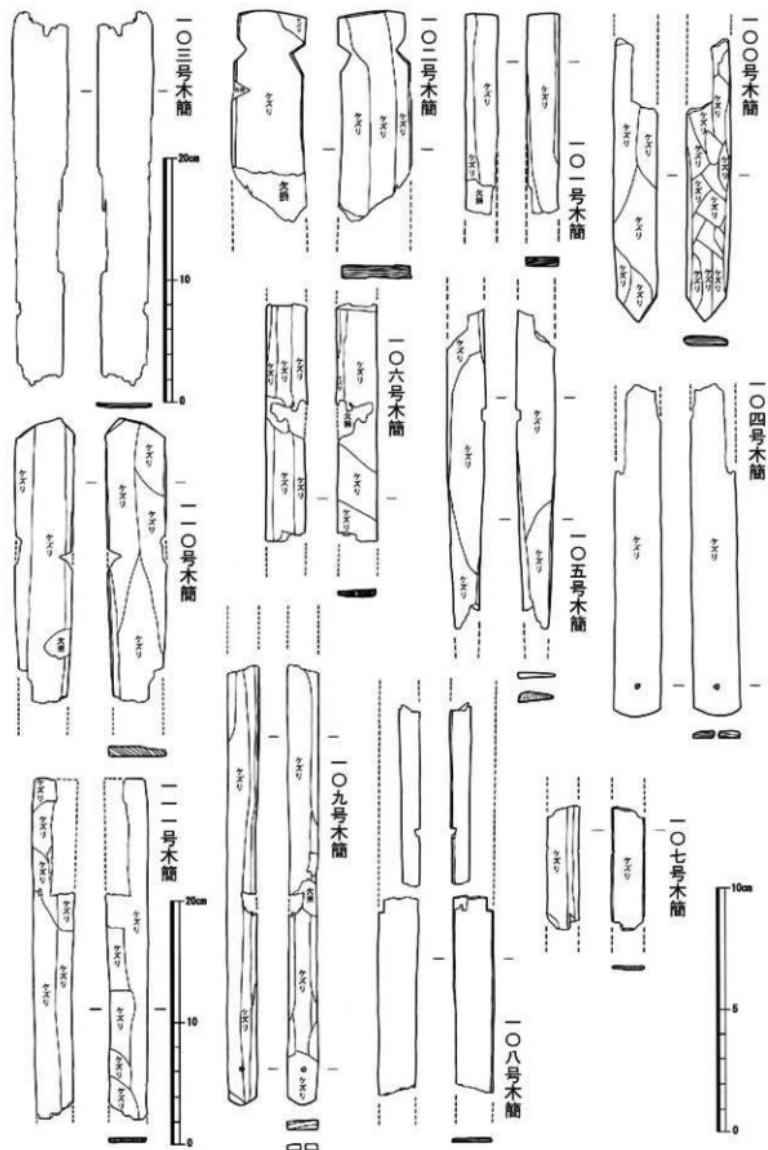
•

(八)×—三×三〇—九
る。継長の削りによつて両面

が平坦に整形されている。表面一文字目は「平」を左肩にもつ文字の可能性がある。■■出上の木簡。

上・下両端は折れ、左右両辺は割れている。薄い木簡で両面に削り面は見えないが、薄い墨痕で多くの文字が確認できる。習書木簡か。表面の上部と左行には同一文字の繰り返しがみられる。層出土の木簡。

第五〇二図 木簡実測図(3)



圖版八四



一〇九号木簡

10

(一七九) × 一 × 二 = 六

三三

卷之三

上端は折れ、下端と左右両辺は削り、檜扇の骨材に墨書きしたもの。途中に「田方」と読み取れそうな部分があるが、字画が整わない。三層出

が逆で、顔を左向きに描く。鳥の場合は本日方向の絵とも解釈できる。

一一〇是木簡

白米五斗

(一六)×(九)×四〇九

二二二

一八六×(四三)×七 ○六五

一片が接合する。上端は山形に削り、下端は折れ。左右両辺は削りにより原形を留める。両面とも縱長の削り面によつて整形され、裏面の方が平坦である。Ⅲ層出土の木筒。

部分に墨書きがある。矩形状部分の左辺のみ割れ。その他の部分は原形を

一
一
二
三
四

一八鳴

(一七八)×二四×三〇八一

上端と左右両辺削り。下端折れ。左辺上部を欠損する。「八鶴」は木

箇の中央寄りの位置に記されており、上部には大きな余白がある。なお、裏面には墨線状のものがあるが文字にはならない。曲物の側板か。

残る。これらもあるいは孔の痕跡の可能性もある。軸状部分が中心に位置していたとする、頭の部分は本來方板状を呈し、上端に三カ所、及びこれに対応する下端に二カ所（軸の取り付け部分にはなし）の切り込みがあつたとみられる。形態としては題籠軸状を呈するともいえるが、題籠に相当する部分が異常に大きく、また軸部分が短い。前記のような類例のない加工も施されており、題籠軸とは考えにくい。墨書きはこの本體品に一次的に転用する前のものの可能性もある。国衙に置かれた「所」

の一つか。IV層出土の木簡。

一一六号木簡

「」 「」 「」

(一四八)×八×四 ○三一

上端は削り、下端が折れている。左右は一次的な削りにより、細長く整形されている。IV層出土の木簡。

一四号木簡

〔名カ〕
〔口東郡人安曇羅見

三七・一×(四七)×七 ○八...

上端と右辺は削り。右上はやや丸みを帯びる。下端は一次的な切断か。左辺削れか。二片接続。厚手の板の右上部に墨書きされている。名方郡は八六年(寛平八)に名東・名西二郡に分割されており、この木簡はそれ以降のもの。九三三号木簡に、「書生安曇登主」がみえる。IV層出土の木簡。

一一七号木簡

「」 「」 「」

(八一)×一・一×四 ○二九

上端と左右両辺は削り、下端は欠損している。切り欠きは深く、上部が極端に小さい付札状を呈する。表面は磨滅しているが、両面に僅かな墨痕が残る。IV層出土の木簡。

一五号木簡

「。」 「。」 「」

一八四×四〇×九 ○一

一八号木簡

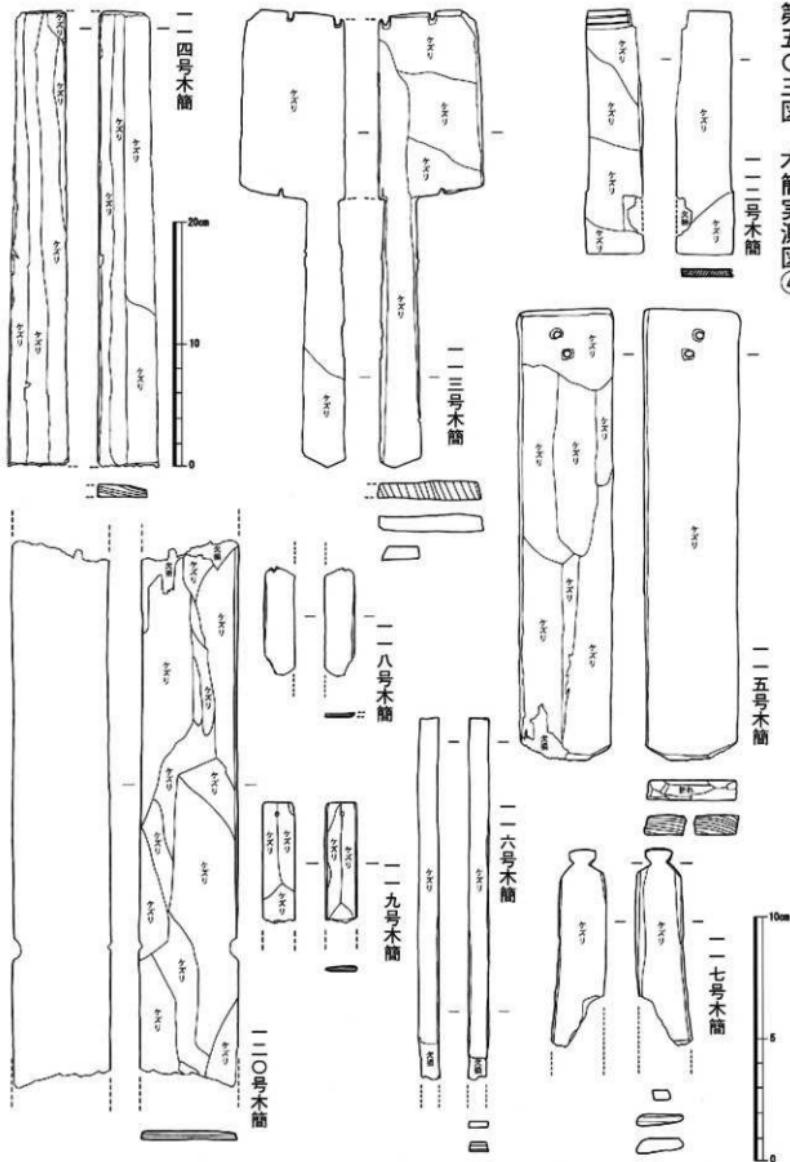
□

(四四)×(一・一)×一 ○八一

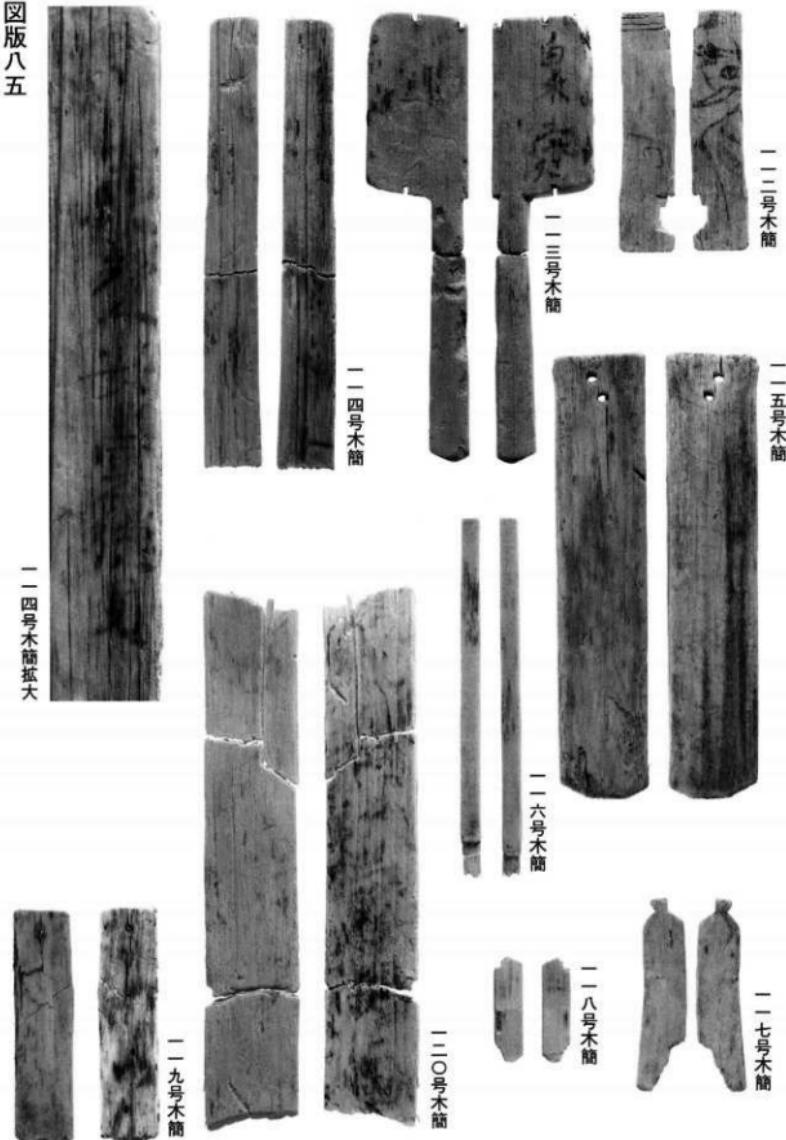
厚手の板の四周を削り、上部には右上・左下に並ぶ二つの穿孔がある。下端は両角を削り、稜をもつ円形に整形している。上部の二つの穿孔は木簡の用途に伴うものか否かは不詳。木簡の幅からみて、比較的大型の木簡を截断して二次的に整形している可能性がある。IV層出土の木簡。

上下両端は折れている。左辺は削り、右辺は割れである。薄い材に僅かに墨痕が残る。IV層出土の木簡。

第五〇三図 木簡実測図④



圖版八五



一一九号木簡

「。□□□」

(四九) × 一三三 × 一 ○一九
上端と左右両辺は削り、下端は折れている。上端に小さな穿孔があるが、木簡の用途に伴うのかは不明である。両面に継長の削り面がみられる。僅かに墨痕が残り、「文字目は「川」、三文字目は「口」、「内」の可能性がある。IV層出土の木簡。

一二〇号木簡

〔阿波直カ〕
〔栗凡カ〕

(一) × 四 × 三 ○八一

四片が接合する。上下両端は折れ、左右両辺は削りによる。文字面は大まかな削りによって整形され、表面は荒れている。複数の薄い墨痕がみられるが、解説はできない。第一行「文字目は「道」などの可能性がある。なお阿波国板野郡出身の采女、栗直若子は栗凡直石子、板野采女栗国造石子とも記された。同郡には栗凡直のほかに凡直がみえ、また養老七年の阿波国造墓碑に、「阿波國造名方郡大領正□位下栗凡直弟臣」とみえる。IV層出土の木簡。

一二一号木簡

(顔の絵) 大春□〔日カ〕

(一一八) × (一三二) × 一 ○六一
人形に墨書きしたもの。上端と左辺は原形を留めるが、下端は折れ右辺は削れている。眉毛と目が墨書きされ、左辺には腕の表現の切り込みが残る。文字は右辺下部に残存するが、右半分が欠落しているため、解説は困難である。四文字目は二文字の可能性がある。IV層出土の木簡。

一二二号木簡

・ □ □

・ □ □

(一〇八) × (一六) × 三 ○八一

上下両端が折れ、左辺は削り、右辺は削れている。文字面には細かな削り面があり、墨痕が明瞭に見える。文字の中央で半裁されているが、木偏・手偏・牛偏の可能性がある。IV層出土の木簡。

一二三号木簡

〔□五□ □□□□□〕

(二一五) × 三九 × 一 ○八一

薄い板が細片に分離し、一の断片が接合する。欠損部分も多いが、残存部分から上端と左右両辺の削りが確認できる。下端は折れ、下部に

左右から削った痕跡があり、下端は尖っていた可能性がある。片面に數文字の墨痕を確認できるが訛説はできない。IV層出土の木簡。

「五斗」の下には文字は続かない。なお、皮表の付札は、「一四四号木簡」に類例があるが、品目・数量に統けて地名が記されており、記載順序が異なる。IV層出土の木簡。

一二四号木簡



(三七×(一・三七)×五 ○五一

四周削り。一端は方頭、他端は左右から削って尖らせたものが折損している。両面に墨書のある横材木簡を一次的に整形したもの。便宜上、尖頭状を呈する方を下端として帆文を表記した。両面ともに縱長の細かな削り面があり、横材として複数文字がみられる。文字はいずれも大振りである。裏面の「□□」とした部分も横材としての利用で、複数行の文字があるが、行数は確定できない。IV層出土の木簡。

一二六号木簡

「」。

(五二)×(九×一 ○八一

上下両端が折れ、左右両端は削り。左上部に墨痕がみられ、その下に穿孔がある。穿孔が木簡の用途に伴うものかは不明である。中央からやや左よりにあり、櫛扇とは異なる。IV層出土の木簡。

- 23 -

一二七号木簡

・合目九今

■「九□

(八四)×(二三×四 ○一九

上端は左右からの削りによって山形に整形されており、下端は折れている。両面に明瞭な墨痕が残る。表面とした側は縱長の削り面で構成されているが、裏面は細かい削り面が残る。裏面一文字目は斜めの墨線で抹消している。表面は裏面に書こうとした文字を再度止しく書こうとしている。左端は折れ、右端は切断されている。左右両端削り。両面ともに縱長の削り面がみられる。墨痕が薄く、赤外線写真で僅かに文字がみえる。

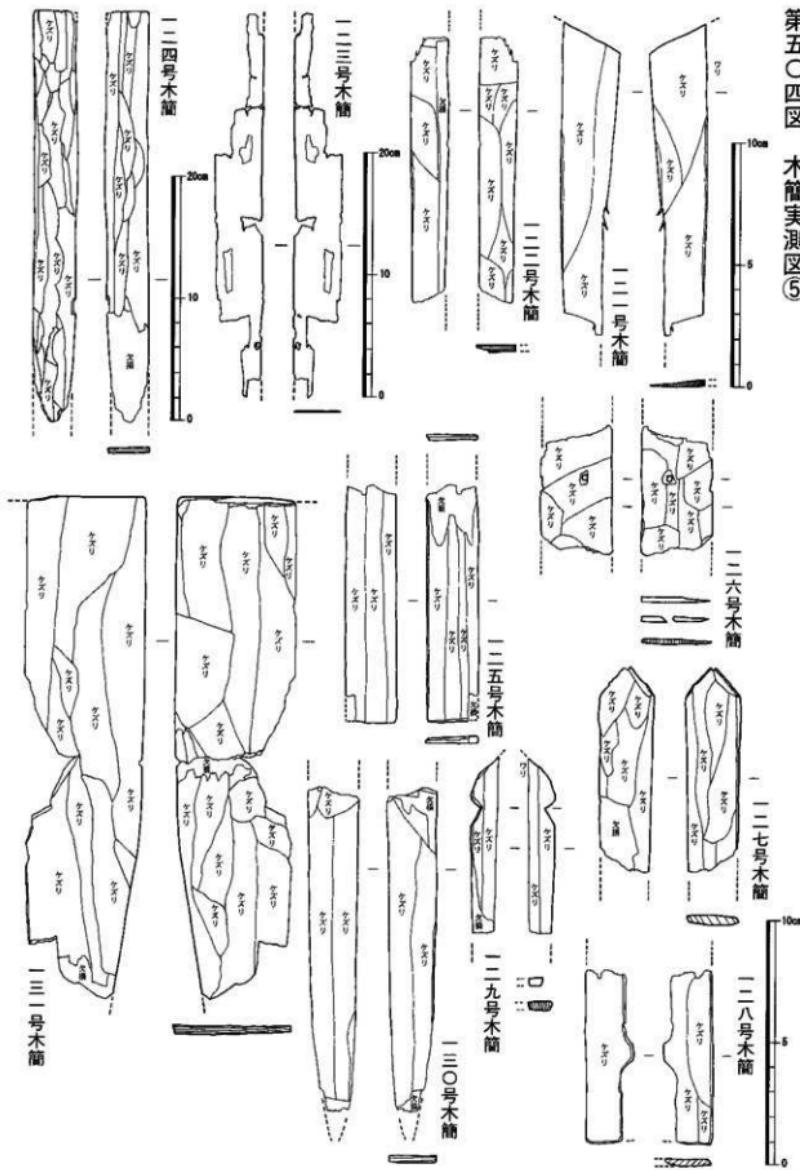
一二五号木簡

□皮表五斗

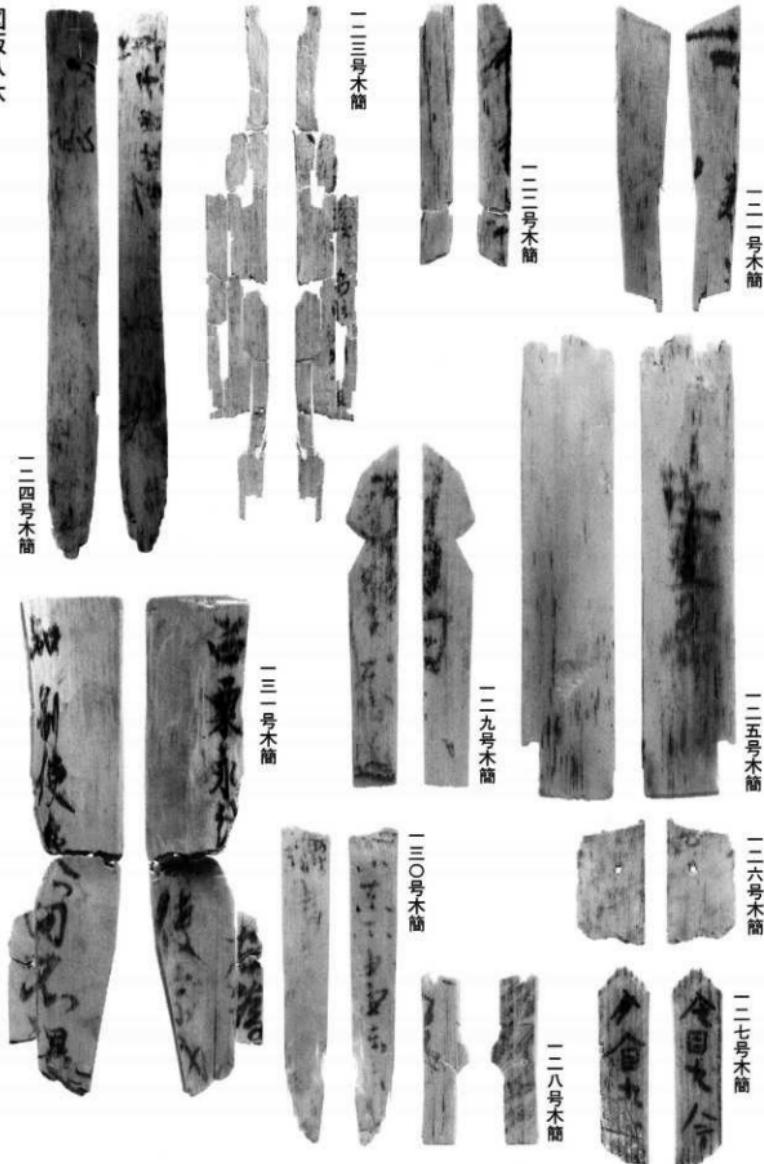
(九八)×(二一×二) ○一九

上端は折れ、下端は切断されている。左右両端削り。両面ともに縱長の削り面がみられる。墨痕が薄く、赤外線写真で僅かに文字がみえる。

第五〇四図 木簡実測図(5)



圖版八六



一二八号木簡

・□□
・□

(七一)×(一〇)×一〇八一
上端は折れ、左辺は割れている。下端と右辺は削り。表面とした面には削り面がみられるが、裏面は整形された痕跡はみられない。両面に明瞭な墨書きがあるが、欠損部が多く訛読みはできない。IV層出土の木簡。

一二九号木簡

・<「日日」

(七一)×(一)×二〇八一

木簡を二次的に整形し、一端を宝珠形に尖らせて左右に一对の切り込みを入れたものの断片。下端切断。左辺切削。一面に「日」を連書するが、呪符を二次的に整形することは考えにくいので、符縁ではなく習書とみられる。IV層出土の木簡。

一三〇号木簡

・□「由□□」
〔由カ〕

(一)×(一〇)×二〇八一

召文木簡の上部で、四片が接合する。上端と左辺は削り。下端は折れ、右辺は割れている。左辺下部は二次的にやや細く削り出されている。両面ともに縱長の大きな削り面で整形されている。残存する文字を中心にして折り返すと幅八四程度となり、長さも六〇cm(一尺)程度の大形の木簡であった可能性が高い。「召」十人名+「右為」という召文の書式は、福岡県長野角屋敷遺跡出土木簡に類似がある(『筑北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室』一九九九『長野角屋敷遺跡』)。板野郡の栗原、栗凡直、凡直、名方郡の栗凡直については、一三〇号木簡を参照。「宗我」については、「板野郡田上郷口主宗何部麻呂」がみえる(木簡学会一

上下両端折れ。左右両辺削り。文字は比較的明瞭だが断定は難しい。

表面の二、六文字目は「東」または「東」の可能性がある。二文字目は同じ文字を崩して記している可能性がある。また、一文字目は「小」の字形のみが残り、これらと同じ文字の一部の可能性がある。いずれにしても、この木簡も同じ文字を繰り返し記しており、呪書木簡の可能性が高い。IV層出土の木簡。

一三一号木簡

「縦カ」
「召栗永」右為×
〔召カ〕
「□兩使參向不□×」
〔知カ〕
〔我カ〕
〔得カ〕

(一〇六)×(四九)×四〇八一

召文木簡の上部で、四片が接合する。上端と左辺は削り。下端は折れ、右辺は割れている。左辺下部は二次的にやや細く削り出されている。両面とともに縦長の大きな削り面で整形されている。残存する文字を中心にして折り返すと幅八四程度となり、長さも六〇cm(一尺)程度の大形の木簡

であった可能性が高い。「召」十人名+「右為」という召文の書式は、福岡県長野角屋敷遺跡出土木簡に類似がある(『筑北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室』一九九九『長野角屋敷遺跡』)。板野郡の栗原、栗凡直、凡直、名方郡の栗凡直については、一三〇号木簡を参照。「宗我」については、「板野郡田上郷口主宗何部麻呂」がみえる(木簡学会一

九九八「木簡研究」(一〇号)。また延喜二(九〇一)年の「板野郡出土
郷戸籍」には、栗・凡直・栗凡直・宗我部などがみえている。V層出土
の木簡。

一三一号木簡

〔別納稻拾束カ〕戸主□
「。□□□□□

(一三七)×(一〇)×(一〇八)

上端は削りによって弧状を呈し、上部に穿孔がある。右辺にかけて原形をとどめるが、下端は二次的整形の可能性がある。左辺は一次的に削った後に削っているため、穿孔の位置が左寄りになつてある。文字面は綫長の削り面で構成されるが、裏面は左下から右斜め上方に向かって削られた細かな面が観察できる。墨痕は明瞭だが文字部分が欠損しており、解説は困難である。「栗」については、一三一号木簡を参照。V層出土の木簡。

一三三号木簡

〔府掌等カ〕
「。□□□解申可□火事□

〔海廣海海〕

(一九五)×(三六)×(一〇一)

上端は一部欠損しているが、削りにより原形を留める。下端は一次的切断(切り折り)の可能性がある。右辺は一次的に削っているが、左辺は削裁されている。表面の文字は左半分のみが残る。裏面は大振りの習書で、文字の左端部分を欠く。木簡の裏面に習書した後、縱に削裁したものと考えられる。残存する文字を中心にして折り返すと、幅八cm程度以上となり、これも大型の木簡であつた可能性が高い。両面ともに綫長の大きな削り面で構成されている。「府掌」は国府の官人にはみえないので、問題を残す。国衙内で起つた火事のことを申上したものか。裏面は別筆で「海」「廣」の文字を習書している。V層出土の木簡。

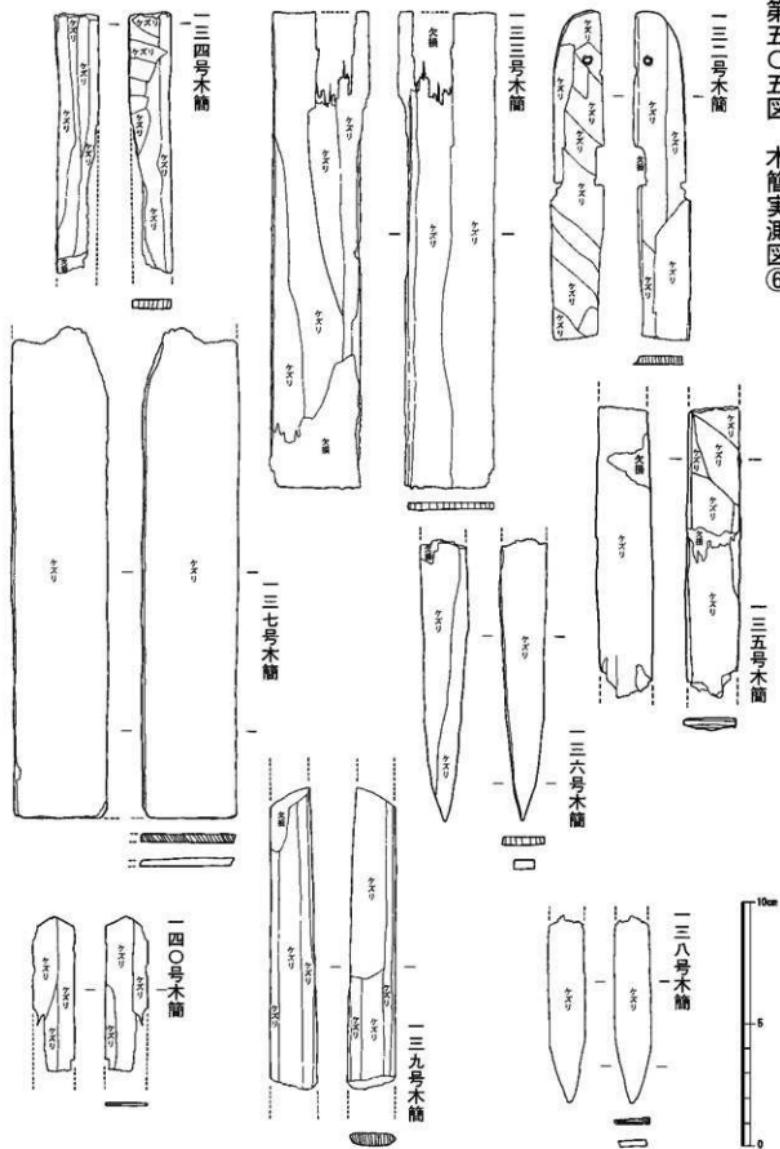
一三四号木簡

〔殖栗郷秦石崎

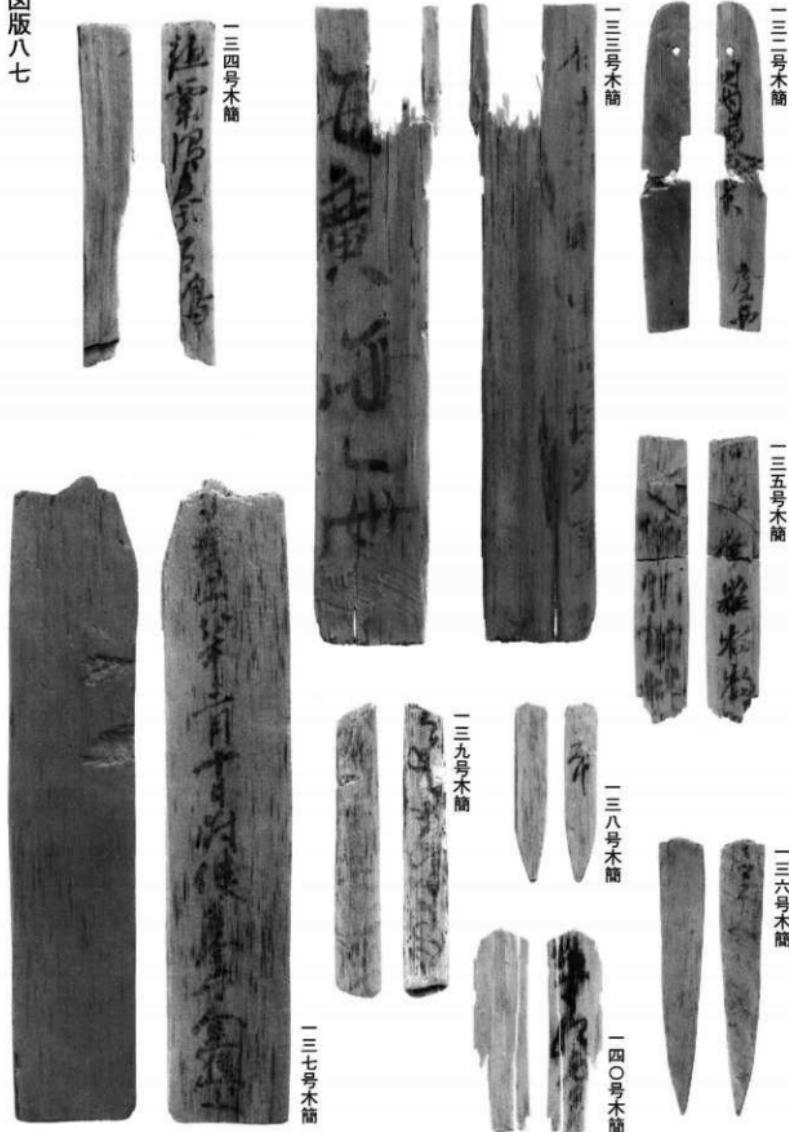
(一〇七)×(一七)×(四〇一九)

上端は切斷し、下端は折れている。左右両辺は削りにより原形を留めるが、左辺下部は大損している。両面ともに綫長の削り面で構成されるが、文字面の左辺上部に細かな削り面がみえる。文字は明瞭。「郷名十人名」の〇五一型式の付札の断片か。「殖栗郷」は「利名類聚抄」(以下「和名抄」)にみえる阿波國名方東郡殖栗郷にある(八九六年の東西分割以前は名方郡)。一六二号木簡に「殖栗」、一七七号木簡に「殖栗秦人マ満女」、一八〇号木簡に「栗參」、一九六号木簡に「」(殖栗郷)「長秦」がみえている。秦氏の事例として、一八〇号木簡のほかに、二〇一号木簡に「秦百足」がみえている。また延喜二年の「板野郡田上郷戸籍」にも秦氏がみえている。V層出土の木簡。

第五〇五図 木簡実測図⑥



圖版八七



一三五号木簡

〔雜雜カ〕

□ 雜雜物 □

□ □ □ □ □

(一・八)×(二)×四 ○一九

一片が接合する。上端は切断され、下端は折れている。左右両辺は削り。両面ともに平坦に整形されるが、裏面の墨痕は薄く、判読しがたい。

V層出土の木簡。

一三六号木簡

〔マ子人〕

(一・四)×一八×四 ○五九

上端は折れている。左右両辺は削りで、下端は左右から削って尖らせた。肉眼では文字面全体に墨痕状のものが黒く付着するが、赤外線写真にはならず、墨ではない。一文字目は「王」または「生」の可能性があり、姓ミブの一部とみられる。一八六号木簡に名方郡井上郷の「生王・満万呂」、三七号木簡（南）に「生マ諸光」がみえる。また「那賀郡武芸駄子戸主生都東方戸同部毛人」もみえる（木簡学会 一九八七「木簡研究」九号）。V層出土の木簡。

一三七号木簡

〔金カ〕

×平寶字八年二月十日附傳馬金マ □進上

(一〇〇)×(三八)×三 ○八一

上端は欠損している。下端と右辺は削りにより原形を留めるが、左辺は削れている。ほぼ平坦な木簡の片面に僅かに墨書がある。長大な文書木簡の末尾部分の断片であろう。天平寶字八年は七六四年。名方郡井上郷に弓金・弓金マが分布していたことは、一七二号木簡や一八八号木簡、三四号木簡（南）で確認できる。V層出土の木簡。

一三八号木簡

〔五斗〕

(七七)×一四×三 ○五九

上端は折れ、左右両辺と下端は削り。下端は左右から削って尖らせる。両面とも、ほぼ平坦な木簡で墨痕は明瞭にみえる。「五斗」とのみ記し、一一〇号木簡の記載様式と異なる。V層出土の木簡。

一三九号木簡

〔絵カ〕

(一一三)×一九×五 ○六五

上端は折れ、下端は切断されている。左右両辺は二次的整形の可能性

がある。両面に僅かに墨痕が残るが軽読は出来ない。V層出土の木簡。

一四〇号木簡

〔八方カ〕
□□郷□□

(六四)×一七×一 ○八・

上端と左右両辺は削り。下端折れ。上端は山形に削る。「八」にあたる部分はシミが多数あり、墨痕は判然としない。「八万郷」は「和名抄」にみえる阿波国名方東郡八万郷にある。徳島市中心部から、やや東南の眉山南麓に徳島市八方町が広がっている。郷名に続く文字は「海マ」の可能性があり、「郷名十人名」の付札の類例の一つ。V層出土の木簡。

が数詞として用いられているのも興味深い。阿波国術と旧吉野川の距離は「生螺」を運べるほどのものだったことがわかる。国衙所在地の名方郡に海直が分布していた〔日本三代實錄〕貞觀六年四月二十一日条)。V層出土の木簡。

一四二号木簡

〔海部カ〕
□□□□□

(一〇六)×一〇×一 ○八・

上下両端は折れ。左右両辺のみに削り。ほぼ平坦な木簡の片面に、僅かに墨痕がある。三文字目は「也」または「是」を必らにもつ文字。V層出土の木簡。

一四一号木簡 〔矢生螺百貝〕

一〇〇×一・一×四 ○三・一

完形の付札木簡。上部に切り込みが施されている。文字面はほぼ平坦だが、左側に細かな削り面が残る。裏面は縦長の面のみで構成され、やや右ドガリの刻線が一〇本引かれている。単なる傷とは思われず、荷物のチェックに関わる可能性がある。その場合、「螺」が一〇個単位で、〇の荷物に梱包されていた可能性を示唆する。「螺」は巻貝の一種の総称。カワニナ・ウミニナ・イソニナなどがある。現在でも吉野川の河口から一〇細ほどは汽水界で、春先には潮干狩りの光景がみられる。「貝」

一四三号木簡 〔多比魚廿口国〕

一一二×一〇×五 ○一・一

四周削り。完形の木簡。「多比」は螺のこと。「多比魚」は例が少ないが、藤原宮跡出土木簡に「多比魚十五斤」という類例がある(奈良県教育委員会 一九六八〔藤原宮跡出土木簡概報〕)。単位が口であるのは、「多比」の容姿に付けた木簡だからか。末尾の文字は「国」で問題ない。

にあるのかも知れない。V層出土の木簡。

一四四号木簡

・「V皮麦五斗阿波郡□」

・「V

八月七□

(九七)×一七×四 ○三三

上端と左右両辺は削り。下端折れ。「皮麦」は大麥の一系統で、裸麥に対応する。「佐比」は「和名抄」には対応する郷名はみえないが、六号木簡(南)に「佐井五十」「がみえる」と関係があるかも知れない。但し、同木簡に「佐井五十戸」と並んでみえる「波尔五十戸」と「高志五十戸」はともに名方郡内に対応する郷名があるので、「佐井五十戸」も阿波郡の郷名ではない可能性がある。なお、阿波國阿波郡の小麦の付札が平城京跡から出土している(奈良國立文化財研究所 一九九五「平城京木簡」一一二六)。一二五号木簡に「□皮麦五斗」がみえる。V層出土の木簡。

一四五号木簡

「V□ □」

一三六×二一九×五 ○三三

完形の付札木簡であるが、裏面の上部が欠損し剥離している。両面とも綫長の削り面で構成されるが、下端に小さな削り面がみられる。片面に薄い黒痕を確認できるのみで誤説は出来ない。V層出土の木簡。

一四六号木簡

五斗「知牛万呂」

(一〇四)×二八×四 ○五九

上端の大部分が欠損している。下端は左右両側から削って尖らせる。基本的に綫長の削り面で構成されるが、文字面の方がやや細かな整形が施される。郷名のみの米の付札か。「知」は担当者を示す可能性がある。V層出土の木簡。

一四七号木簡

「<忌部郷長上 蔽

(八〇)×九×五 ○三九

下端が欠損した付札である。非常に幅が狭く、切り込みが浅い特異な形状をしている。両面とも平坦に整形されている。「忌部郷」は阿波国麻植郡内の郷名。「舞長上」は郷長が貢進主体であることを示すとみられる。郷長が貢進主体となる付札は稀であるが、平城京出土木簡には類例がある(奈良文化財研究所 一〇〇一「平城宮発掘調査出土木簡概報」³⁶五二など)。「蔵」とした文字は、草冠に「口」を四つ書く字形。「蔵」は「草」に同じ。「蔵」の付札は類例がない。「忌部郷」は阿波(忌部郷)の本拠地で、吉野川市山川町忌部山を中心とした一帯。延喜式神名帳には、同郡に名神大社の忌部神社がみえている。中世には山崎市(忌部市)が立つて脈わった。神社の裏山にある忌部山には忌部山古墳群が所在する。V層出土の木簡。

一四八号木簡

・櫻間漢人福継

〔得カ〕



(一〇一)×(一六)×一〇八一

上端は折れ。下端は本来尖っていたものを、一次的に削って平らにしと考へられる。左右両邊は割れている。文字面は比較的の平らで削り面が少ないが、裏面は全面を縱長の削りで整形される。裏面にも薄い壓痕がある。「郷名十人名」の付札の類例の一つ。「櫻間」は阿波國名方郡内の郷名。櫻間郷は一六一弓木簡、一八五弓木簡、一八七弓木簡、二二一弓木簡〔「櫻間里」とする〕にもみえる。「櫻間」の地名は、現在も徳島市国府町櫻間として残り、すぐ西側の石井町高川原に桜間神社が鎮座している。「漢人」の氏名は三〇弓木簡（南）、六六弓木簡（南）に、また那賀郡にも漢人姓がみえている〔大日本古文書〕一五一二七、一五五一四八、延喜一年の〔板野郡田上郷戸籍〕には漢人直がみえる。V層出土の木簡。

る。平城宮跡内裏北外郭官衙の土坑SK八一〇出土の阿波國の賛の木簡に非常に似た書風を示す〔奈良國立文化財研究所 一九六六 平城宮木簡〕一四〇三）。一条大路木簡に阿波國の賛でウニの付札が出士している〔奈良國立文化財研究所 一九九〇 平城宮発掘調査出土木簡概報〕。ウニについては、延喜元計式に被甲贏・甲贏と表記する。徳島県南部の海部郡美波町などではウニの漁獲量が多く、馬糞ウニは加工してビン詰とし、出荷されている。V層出土の木簡。

一五〇号木簡



如何

(一七四)×(二四)×五〇四九

上端折れ。下端は二次的整形の後、折れて表面が剥離している。左右両邊の削り面によって封緘状を呈するが、裏面は削りのままではなく、縱長の削り面で構成されている。文字面は基本的には縱長の削り面で構成されるが、下端部に細かな整形がみられる。左上部の削り面によって、文字の左半分が削り取られている。割りを入れる前の封緘木簡の未製品に習書したものか。V層出土の木簡。

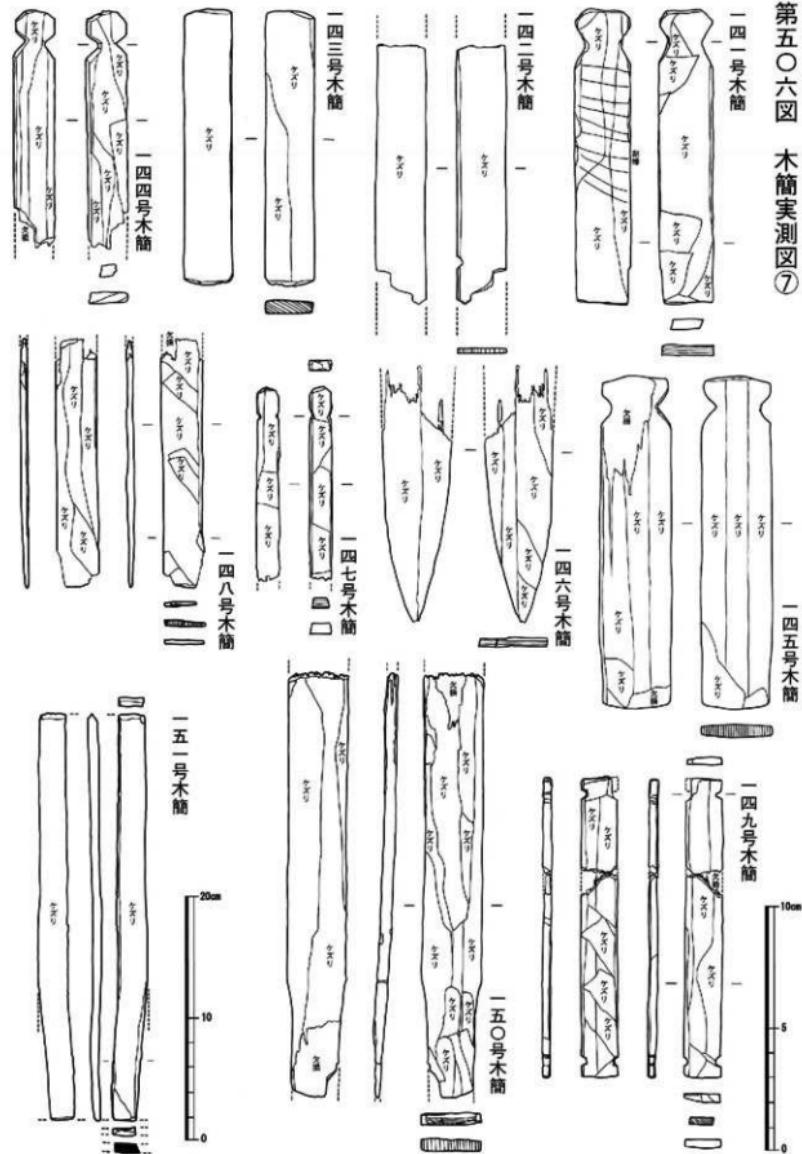
一四九号木簡

「阿波國進御贊甲贏它付」

(一七一)×(一五)×三〇三一

一片に分離し中間を僅かに欠くが、ほぼ完形。上下両端には、阿波國の贊に特徴的な台形状の切り込みを作ろうとする意図がみえる。両面は縱長の削りによって整形し、裏面の下半分に斜め方向の削り面がみえ

第五〇六図 木簡実測図⑦



圖版八八

一四一號木簡

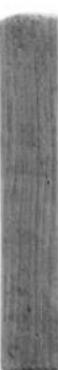
大
然
百
目



一四二號木簡



一四三號木簡



一四四號木簡



一四五號木簡



一四六號木簡



一四七號木簡



買根道見



一五一号木簡

一五〇號木簡



一五二號木簡



阿
波
國
通
紀
中
國
事
記



一四九號木簡



一四八號木簡

一五一号木簡

買根道見

〔二〕

「二」「二」「道道道道道前」

〔易カ〕〔易道道カ〕

「」
□□□□
〔箱カ〕

「二」五×（二）×七 ○八一

上下両端と右辺は削りにより原形を留めるが、左辺は割れている。右辺の下端から三分の一ほどが割れて、全体的に左に折れ曲がった形になつてある。両面ともに平坦で、表面中央尖部の墨痕は非常に明晰である。それに対し、三行目は墨色が薄い。習書木簡。「根道」は人名かとも思われるが、「根」の字がやや小さく、問題を残す。V層出土の木簡。

一五一号木簡

見残薪廿七荷

（九七）×（二）×四 ○八一

上端は折れ、下端は削りによつて整形されている。左右両辺が割れ、左辺下部に切り込みの痕跡が残る。薪の数量を書いた付札状の木簡を、用途不明の木製品に再加工したもの。文字面は縱長の削り面で構成されるが、裏面はほぼ平坦である。「見」は「現」の省略か。V層出土の木簡。

一五四号木簡

「」
□□□□

（一）五×（一）五×七 ○一九

上端と左右両辺は削りにより原形を留めるが、下端は折れている。両面ともに幅の狭い縱長の削り面で構成されている。特に裏面は削りが多く、断面形が凸レンズ状を呈する。特異な字体で書かれており、訛説できないが、一文字目は「止」「乞」など、四文字目は「直」の可能性がある。V層出土の木簡。

一五四号木簡

〔鶴カ〕

「」
□□□□□□□□□□

一六六×一五×四 ○五一

完形。四周削り、上端は兩角を削り落として弧状に整形し、下端は左右両側から削つて尖らせてある。裏面は黒色を呈し、何かを塗布している可能性がある。裏面に薄く墨痕が認められるが、訛説はできない。表一文字目は「井」または「尔」、五文字目は「多」、七文字目は「糸」、「東」、「東」などの可能性がある。形状からは「鄰名十人名」の付札の可能性が考えられる。本事例のよう、上端を弧状に整形し、下端を尖らせた可能性のあるものとして、一八八号木簡、二〇〇号木簡、一号木簡（南）、九号木簡（南）、五四四号木簡（南）などがある。V層出土の木簡。

一五五号木簡



(九二) × (六) × 七 ○六一

題簽軸の題簽部分である。軸部は根本から折れている。題簽部の長さは約八五mmで異例に長大であるが、長岡京跡出土「東院内候所取帳」の題簽（木簡学会一〇〇一「木簡研究」二三号）に類似がある。両面とも縱長の削り面で構成されている。墨痕が薄く訛読困難であるが、両面に文字があつたと考えられる。V層出土の木簡。

一五六号木簡



(八六+八〇) × 一六 × 五 ○一九

合計五片が接合するが、中間部分を欠損する。上端は切断され、下端は削り。左右両辺は、一次的削りによって細くなっている。表裏両面に細かな削り面が連続している。上部の文字の右側には、線状の墨痕が残るが文字にはならない。文字の多くは「反」あるいは「文」のような字形を旁にもつて、左半分を欠き訛読はできない。下部は一行の可能性もある。V層出土の木簡。

一五七号木簡



(九八) × (五) × 六 ○八一

上下両端は折れ。左右両辺は一次的に割裁され、断面形状は文字面よりも側面の方が広い長方形を呈する。表面の文字は、いずれも偏のみ残るが訛読はできない。裏表で天地が逆の可能性がある。V層出土の木簡。

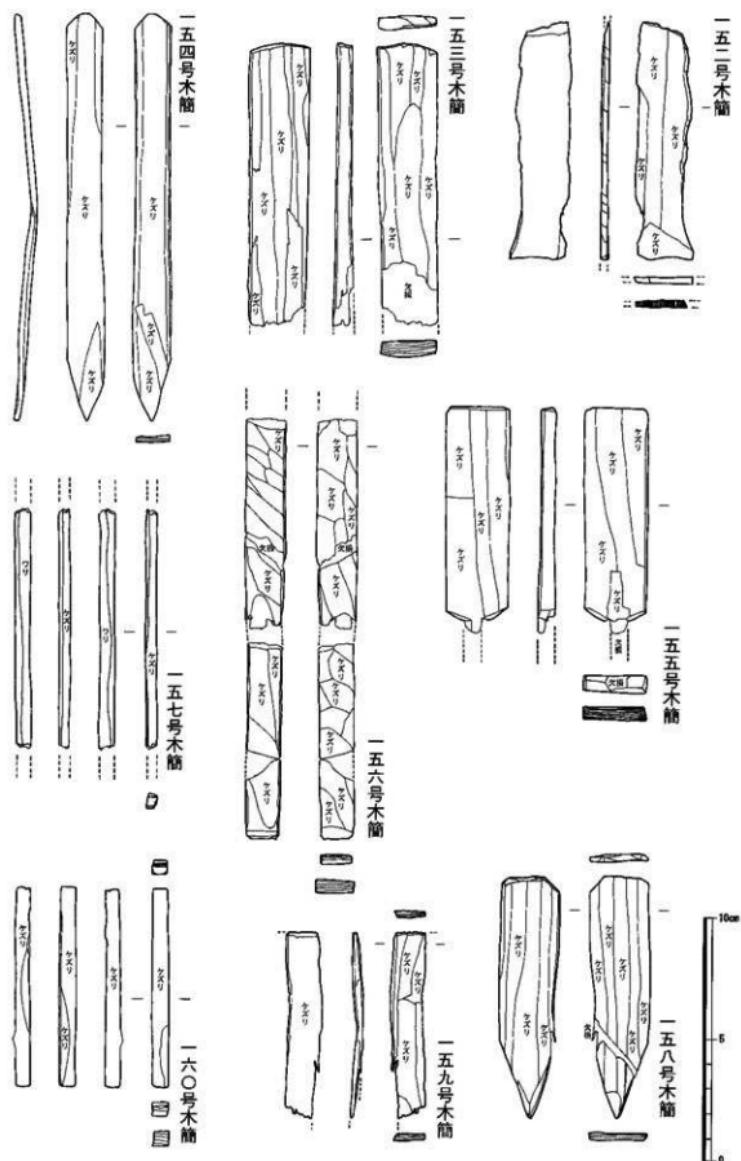
一五八号木簡



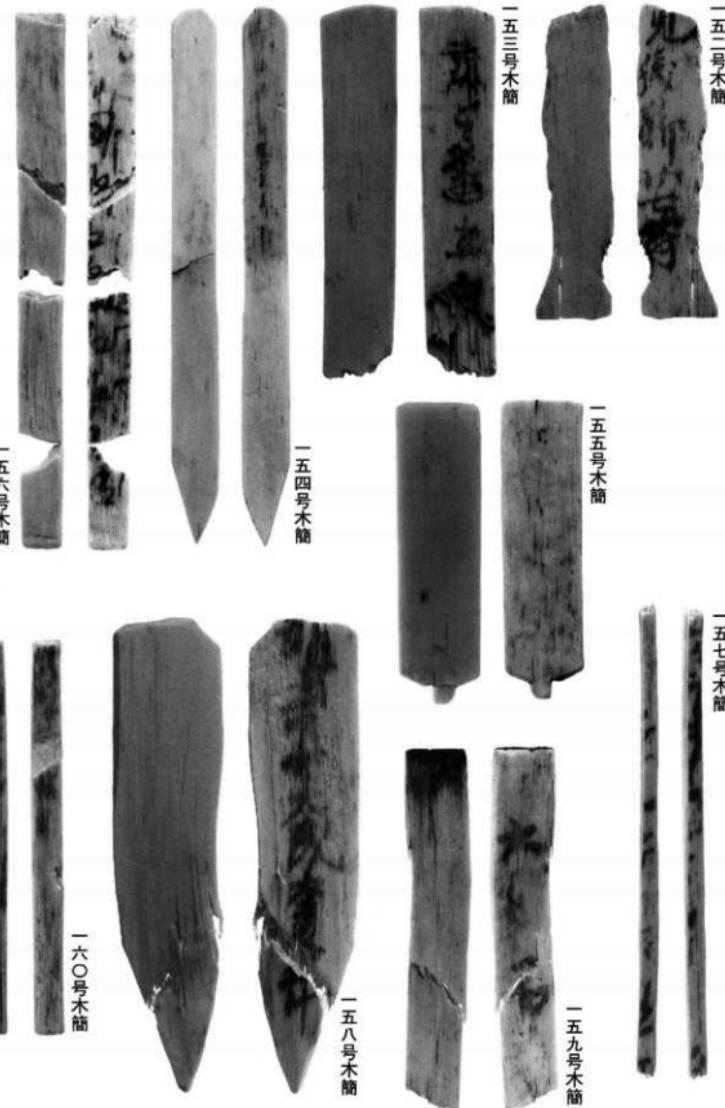
九九 × 二五 × 二 ○五一

上端は切断。左右両辺は削り。左の上端は角を少し削り、下端は左右両側からの削りによって尖らせる。両面ともに細い縦長の削りで整形されている。「埴上」は阿波國名方郡内の郷名。「大麦」は人名の一部か。「鄉名十人名」の大文の付札であろう。左辺上部の角が切り落とされており、切り込みの痕跡の可能性がある。高山寺本「和名抄」では、名方西郡（名西郡）に「埴郷」を掲げているが、刊本では「埴上郷」とする。六〇号木簡（南）に「波尔五十戸」がみえる。大文の系統である皮表については、一四四号木簡を参照。V層出土の木簡。

第五〇七図 木簡実測図(8)



圖版八九



一五九号木簡

「大口石」

(七五)×(一四)×四 ○八一

して表面の一部が剥離している。「櫻間」は阿波國名方郡内の郷名。「郷名十人名」の付札。人名は「網嶋」または「継嶋」か。櫻間郷については一四八号木簡、阿波國の物部は九一号木簡の項を参照。淡路国津名郡、土佐国香美郡に物部郷がみえ、注口される。V層出土の木簡。

上端と左辺は削りにより原形を留めるが、下端は折れ右辺も削れている。裏面上端が黒く塗られているが、墨によるものかは不明である。人名か。V層出土の木簡。

一六〇号木簡

・ □ □

八一×七×六 ○一

完形。四周とも一次的な削りによつて整形され、断面形状が正方形を呈する。「一条大路木簡の算本と考えられている木簡」「安」「左」などと墨書のあるもの。このうち「安」とあるものに特に酷似する。木簡学会編「二〇〇三『日本古代木簡集成』」と形状が類似する。V層出土の木簡。

一六一号木簡

「殖栗長谷宮成」

(一十九)×(一)×一 ○八一

細長く薄い木簡の片面に文字が書かれている。上端と左辺は削りにより原形を留めているが、下端は折れ、右辺の上部は欠損している。「殖栗」は阿波國名方郡内の郷名。「郷名十人名」の〇五一型式の付札の断片か。殖栗郷については一三四号木簡を参照。阿波國における「長谷」は初見史料。V層出土の木簡。

一六二号木簡

「□□□公」

(五四)×一五×三 ○一

上端は切断され、下端は折れている。左右両片は削りによる。文字面は平坦で整形はみられないが、裏面には縦長の削り面がみられる。V層出土の木簡。

一六三号木簡

「櫻間物マ□鶴」

一四一×一九×三 ○五一

完形。上端は弧状に整形され、下端は左右両側からの削りによつて尖らせる。両面には削りはみられないが、ほぼ平坦である。中央部で分離

一六四号木簡



八〇×六×五 ○一一

上下両端は切断、左右両辺は削り。断面が正方形に近い形状を呈する。

いずれも二次的な整形とみられるが、比較的加工が粗い。一六〇号木簡、

二・〇号木簡などとともに、算木とみられる木簡に形状が類似する。表

面・文字目は「歴」の可能性がある。「二字目は禾部（のぎへん）の文

字。二字目に分かれる可能性もある。V層出土の木簡。

一六五号木簡

十七又十束六（刻書）

（七・三）×一四×三 ○八一

上下両端が折れ、左右両辺は削りで「丁寧」に面取りを施す。刻書によつ

て文字を記している。稈の数量を連記したものであろう。V層出土の木
簡。

一六六号木簡



（一四六）×五×七 ○八一

上下両端は折れている。左右両辺は二次的に削裁されて、断面形状が

文字面よりも側面の幅が広い長方形を呈する。文字の一部が確認できる
が、証明できない。V層出土の木簡。

一六七号木簡



（九一）×五×七 ○八一

上端は切断され、下端は折れている。左右両辺は二次的に削裁されて、
断面形状が正方形を呈する。二片が接合するが、文字の一部が確認でき
るのみである。表面一文字口は横画を六本もつ文字。「軍」などの可能

性がある。V層出土の木簡。

一六八号木簡



（一・三）×（一・一）×一 ○一一

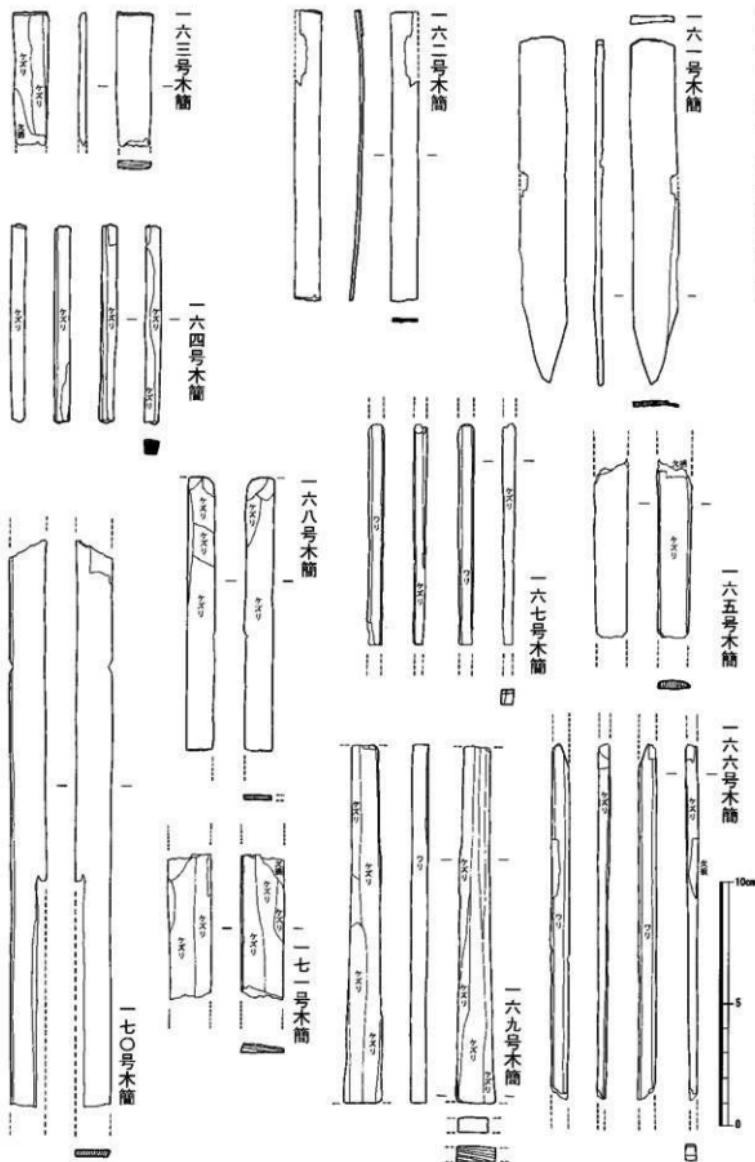
一片が接続する。上端と左辺は削り。下端は折れ、右辺は削れでいる。
両面ともに平坦だが、上部に小さな削り面がみられる。V層出土の木簡。

一六九号木簡

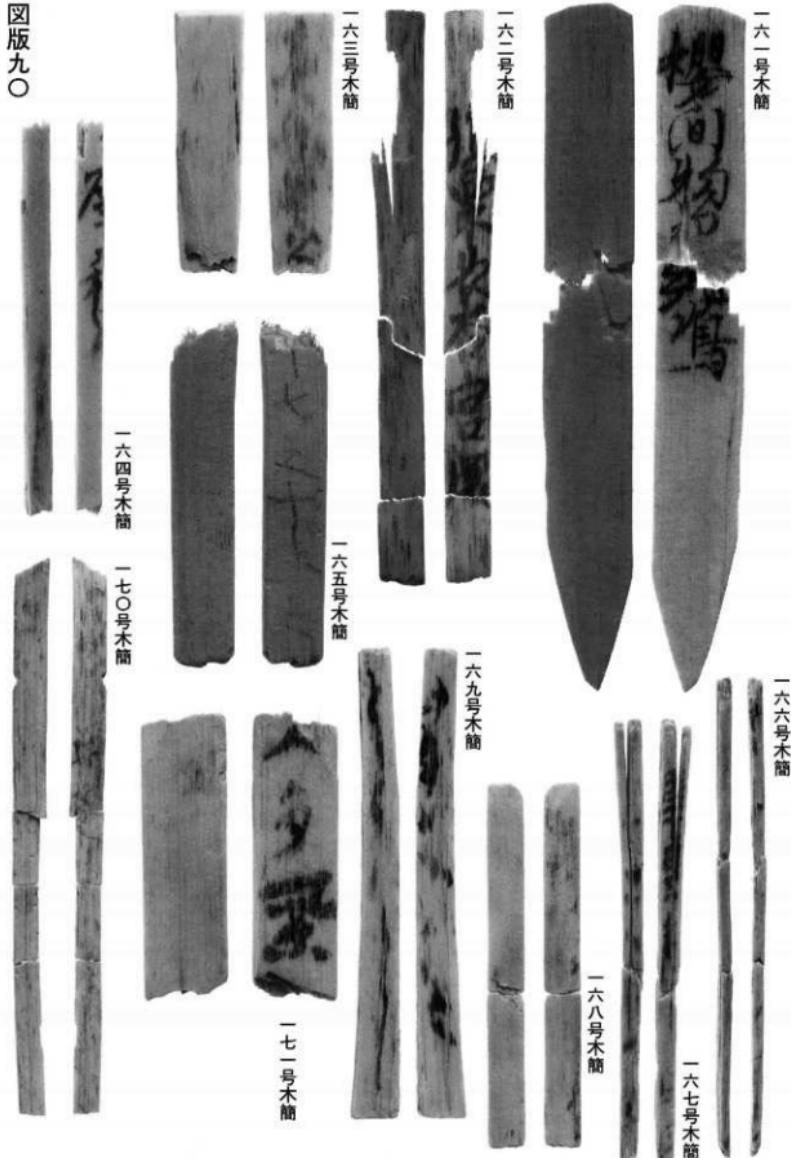


（一四七）×（一・六）×六 ○八一

第五〇八図 木簡実測図(9)



図版九〇



上端は切断、下端は削り。左右両辺が割裁されている。墨痕がみられるが訛説はできない。裏面に線状の墨付きがあるが文字ではない。V層出土の木簡。

一七〇号木簡



(一三・一)×一五×二 ○八一

四片が接続するが、上下両端は折れている。左右両辺は削りであるが、左辺下半分は欠損している。複数の薄い墨痕がみられる。中央の一文字は濃い墨痕が残るが訛説はできない。V層出土の木簡。

一七一号木簡



(六〇)×一八×四 ○八一

上下両端は折れ、左右両辺は削り。両面とも縦長の削り面で構成され、明瞭な墨痕が片面に確認できる。V層出土の木簡。

一七二号木簡



(一一一)×一五×二 ○五一

上端と左右両辺は削り、下端は折れ。上端は切り折り後に削り。右辺

一七三号木簡



一七〇×一七×二 ○五一

下部に、下に向けて細く削り出している痕跡が認められるため、〇五一型式と判断した。「井上郷」は阿波國名方郡内の郷名。「弓金」は「金弓」に同じ。「郷名十人名」の付札である。文字面には縦長の大きな削り面がみられるが、裏面には整形は認められない。名方郡井上郷は、以下の一七五号木簡、一八六号木簡、一八八号木簡や三四号木簡(雨)にみえ、「号木簡(雨)」の「於井郷」は井於郷の書き誤りかと考えられる。一八八号木簡には井上郷の「弓金佐流」がみえている。「弓金」、「弓金マ」については一二七号木簡を参照。井上の地名は、現在、徳島市国府町に北井上小学校、北井上中学校の校名に残されている。JR府中駅から西北へ約一・九kmの所。V層出土の木簡。

木簡に、「那賀郡武芸駅」「那賀郡薩摩駅」がみえており(奈良国立文化財研究所 一九八七「平城宮発掘調査出土木簡概報」)、奈良時代には

阿波国と上佐国を結ぶ駅路の存在が推定されている。「駅人(駅長また

は駄子」として「海マ」がみえる。一四二号木簡でふれたように名方郡に海直がみえ、また延喜二年の「板野郡田上郷戸籍」に海部がみえるので、板野郡に設置された石限・郡頭駄に關わるものかもしれない。V層出土の木簡。

一七四号木簡

「漢人郷落」

一六五×三七×六 ○五一

一七六号木簡



完形。下端は尖頭状を呈するが、左辺に比べて右辺は浅く大きくなっている。○五一型式の木簡としては異例に大型で、大型の木簡を二次的に整形した可能性もある。上部の文字は削書の可能性があるが、そつとすればやや異例な書式。「漢人郷」は「和名抄」には該当する地名がみえない。「漢人」については一四八号木簡を参照。末尾の二字も「海」の可能性がある。V層出土の木簡。

一七五号木簡

「井上高安漢人□身方呂」
(マカ)

一七一×一七×五 ○五一

一七七号木簡

「植栗秦人マ満女」

完形。二片が接合する。上端は表面からの削りによって、薄く削かれている。左右両側から切り込み状の削りが施されており、○三三三型式の木簡の切り込み部分を二次的に切断した可能性がある。このような例は

一五八号木簡にもみられる。下端は左右両側からの削りによって尖らせしており、先端部が僅かに欠損している。文字面の中央部は欠損により一文字分が欠落しているが、「マ」の可能性が高い。「井上」は阿波国名方郡内の郷名。「郷名十人名」の付札。名方郡井上郷については一七二号木簡を参照。「高安漢人」は、「新撰姓氏録」浜津國諸番の高麗の項に、「猶國の人 小須須より出する也」とみえている。高安漢人は河内国高安郡（大阪府八尾市東部）を本拠とする渡来系氏族。V層出土の木簡。

一七九号木簡

一七六号木簡

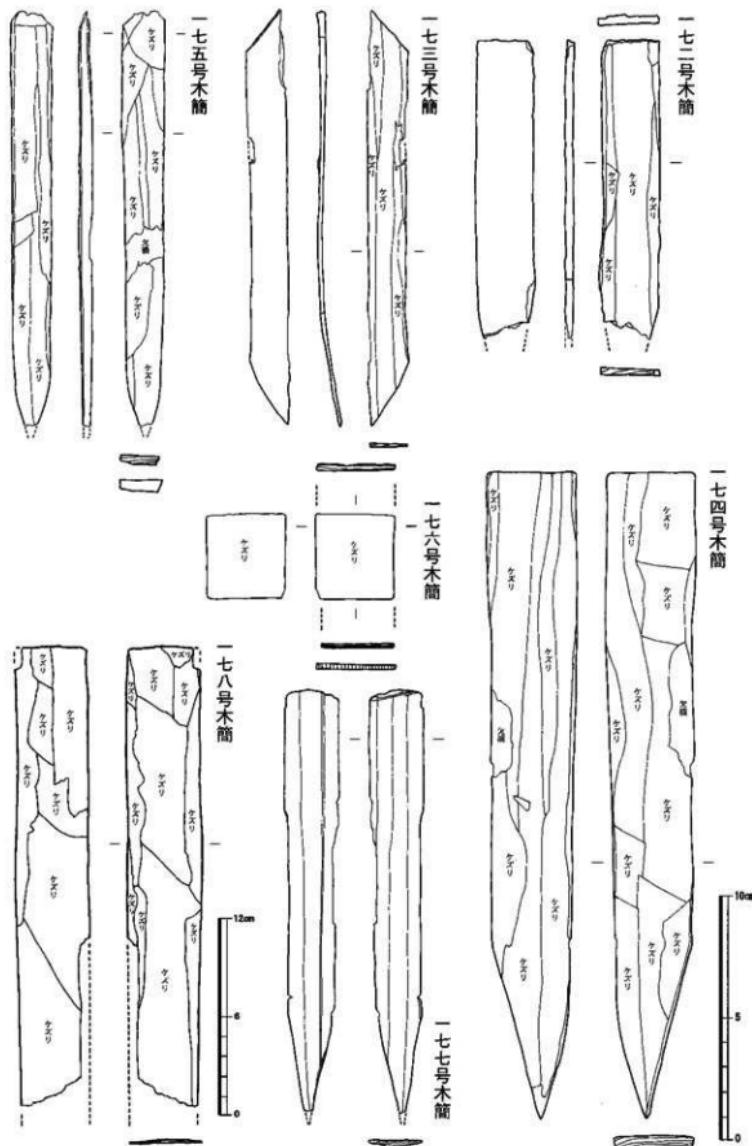


一五五×三一×一 ○一

木簡を二次的に整形し、正方形に加工したもの。表面には「文字」がみえ、加工後に書かれた可能性がある。裏面の文字は加工により完全せず、加工前のものである。裏面各行の末尾の文字は、いずれも「西」と「糸」を上下に重ねる文字。V層出土の木簡。

一七三×二一×三 ○五一
ほぼ完形。整形は粗く左辺はほとんど削ったままである。下端は左右

第五〇九図 木簡実測図⑩



一七二号木簡



一七三号木簡



一七五号木簡



一七六号木簡



一七八号木簡



一七八号木簡人物画放大



中



一七七号木簡



一七四号木簡

両側から削つて尖らせる。裏面はほとんど未調整で、断面が三角形を呈する。文字面の整形も粗く、僅かに墨痕が残り、赤外線写真により文字を確認した。「殖栗」は阿波國名方郡内の郷名。「郷名十人名」の付札。但し、同種の付札で女性名のものは類例がない。名方郡殖栗郷については三四号木簡を参照。「秦人マ」は二〇一号木簡(勘緒木簡)に、「名方郡殖栗郷戸主秦人マ人麻呂」がみえている。V層出土の木簡。

一七八号木簡

「鳥道第第一勝」(人物画)「陽
鳥道第第二第口霧霜家
(記号) 蘭 蘭

(二八〇)×四四×一 ○一九

上端と左右両辺は削り、下端は折れ。両面ともに大きな削り面が残る。明瞭な墨痕がみえるが、表面の整形がやや粗いため、墨が滲んでいる部分がある。表面六文字目は、肉月に「寺」「鳥」を並べる。七文字目は「鶴」の異体字。人物画は王偏のような人物の横顔を丁寧に描く他は、簡略な筆致で趺坐する様子を描きする。裏面の記号は「+」を縁取りす

る形状。V層出土の木簡。

一八〇号木簡

「(補)
口栗空諸カ」

(六七)×(一六)×一 ○八一
薄い板が三片接合するが、上下両端は折れている。左辺は割れているが、右辺には削りが残る。「殖栗」は阿波國名方郡内の郷名。「秦諸口」は人名であろう。「郷名十人名」の付札の断片である可能性が高い。名方郡殖栗郷および秦氏については一二四号木簡を参照。V層出土の木簡。

一八一号木簡

「(津迹カ)
・「<口口郷口口

(九〇)×一九×四 ○一九

上端と左右両辺は削り、下端は折れ。上部に切り込みがあり、付札の下部を欠損したものである。文字面より裏面に多くの削り面がみられる。表面一文字目は王偏のような残画が残り「津」の可能性がある。「津迹」は、「和名抄」にはみえないが、九号木簡(南)に「津迹郷野縁

上・下両端は折れ、左右両辺は削り。上端の折れは僅かで、付札の切り込みの上部が折れたものと考えられる。両面とも大きな削りで整形は粗い。下から二文字目は数字で、「二」「三」「五」の可能性がある。V層出土の木簡。

里」がある。裏面は「一石」の可能性がある。V層出土の木簡。

延暦三年四月廿四日

三〇四

により文字を確認することができた。〔伍合〕には合点が付されている。麦の上の文字は「皮」または「又」。〔丁〕〔詰カ〕の文字の次は「処(處)」の可能性がある。「皮麦」は一二五号木簡、一四四号木簡に類例がある。延暦三年は七八四年。保存処理に際しての再検討の結果により、积文を改めた。V層出土の木簡。

一八三号木簡

「謹解申神原田稻刈得事 合毫□柒拾四束」

留教院四〔東カ〕

〔捨束力〕天平勝寶二年八月十五日□足

二六一

一八五号

櫻間猪使廣山

七六一五〇

上端は両側からの削りによって、角度の浅い山形に整形され、左右両辺も削りにより原形を留めている。下端は切断されているが、二次的切断の可能性が高い。文字面には若干の削り面があるが、裏面は削りのままである。「櫻間」は阿波國名方郡内の郷名。「郷名十人名」の〇五一型

卷之三

二十九

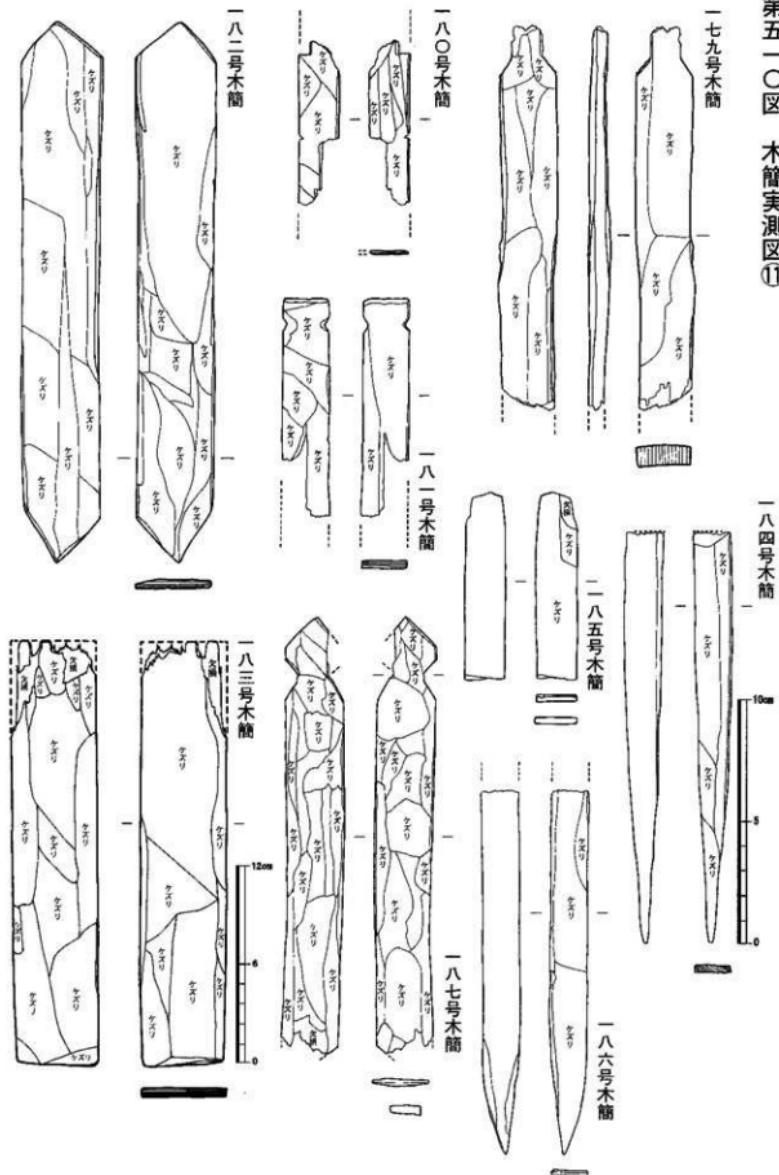
一ノ九

れている。上端は折れた可能性もある。「八万」は阿波國名方郡内の郷名。「大名」は名か。「郷名+人名」の付札。「八万郷」については一四〇号木簡を参照。V層出土の木簡。

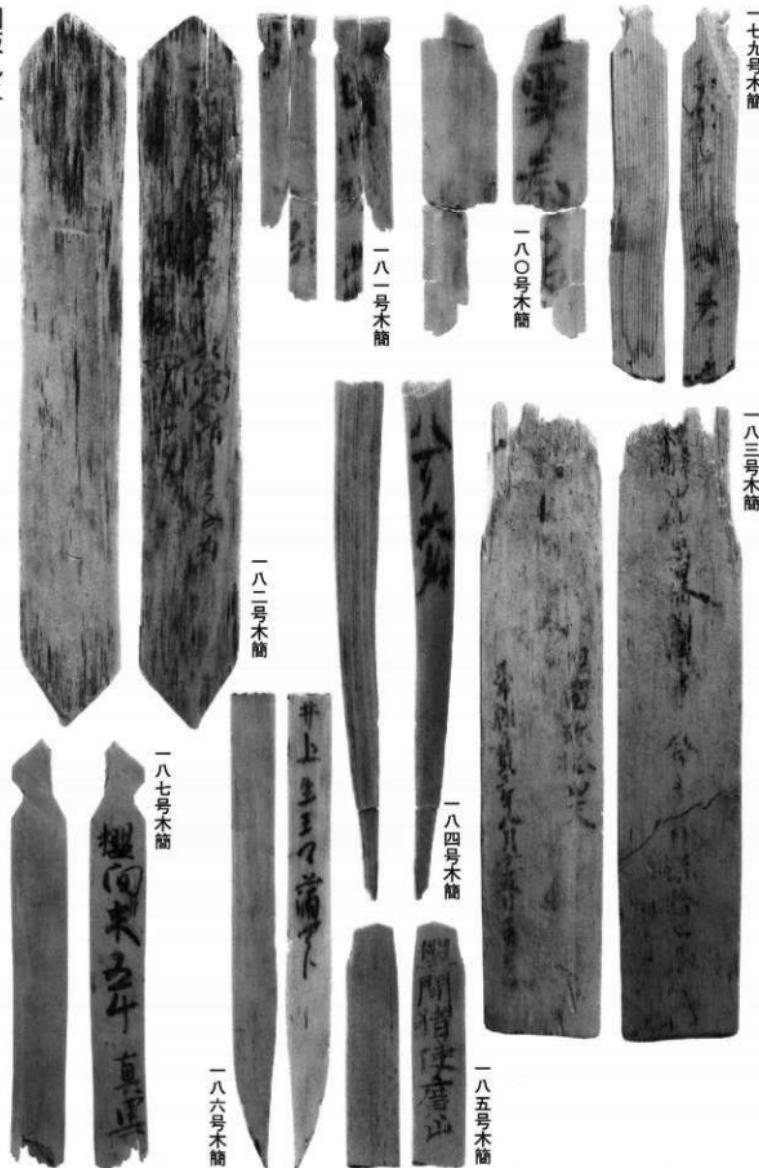
四周とも原形を留めるが、上端の大半は欠損している。両面ともに大きな削り面によって平坦に整形されている。墨痕は両面に確認できる。「神原田」で収穫した稻一七四束について、留めた九四束とそうで

○年、「木簡研究」第二三号（木簡学会 一〇〇一）に報告したが、保存処理に際しての再検討で积文を改めた。V層出土の木簡。

第五一〇図 木簡実測図(1)



圖版九二



式の付札を一次的に整形したものとみられる。「櫻間郷」については、四八号木簡を参照。「猪使」は猪養(甘)部の伴造氏族。天武一三(六八四)年一月に、猪使連は宿禰の姓を賜つた。阿波國の「猪使」は本例が初めてである。藤原宮跡出土木簡に「板野評津屋里猪膳」(奈良国立文化財研究所)一九七五「飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(2)」、平城宮跡出土木簡に「阿波國貢猪薦」(奈良国立文化財研究所)一九九三「平城宮発掘調査出土木簡概報(2)」、延喜式計式には阿波國の山男作物に「猪膳」がみえる。V層出土の木簡。

下部に切り込みの上半が残るため、上下に切り込みが施された付札と考えられる。両面には細かな削り面がみられる。断面形状をみると文字面は平坦であるが、裏面は凸レンズ状を呈している。「櫻間」は阿波國名方郡内の郷名。「貢膳」は追筆。「郷名+品名・数量」のみの米の付札。「櫻間郷」については、四八号木簡を参照。V層出土の木簡。

一八六号木簡
「井上生王マ満万呂」

一八八号木簡
「井上吉金佐流」

一四九×一五〇一〇五一
上端は切斷か、または折損の可能性がある。左右両辺削りで、下端は両側からの削りによって尖らせている。文字面は整形されているが、裏面にはほとんど整形はみられない。「井上」は阿波國名方郡内の郷名。「生王マ」は「生王マ」に同じ。「郷名+人名」の付札。「井上郷」については、七二号木簡、「生王マ」については一二六〇号木簡を参照。V層出土の木簡。

一八九号木簡
「□□□□□□□□天豆不請□□□」
(一三八)×(二)×(一)〇一九
上端は後をもつ円形に整形している。下端は欠損であるが尖らせてい可能性が高い。両面ともに縱長の削り面が残る。「井上」は阿波國名方郡内の郷名。「吉金」は姓。「吉金マ」に同じ。一二四号木簡(南)、一二七号木簡に類例がある。「郷名+人名」の〇五一型式の付札の断片か。「井上郷」については、七二号木簡、「吉金」については一二七号木簡を参照。上端部を弧状に整形し下端部を尖らせた形状については、一五四号木簡でみられた。V層出土の木簡。

一八七号木簡
「△櫻間米五斗『貢膳』」

上端は山形に尖らせ、切り込みをつけた。下端は折れているが、左辺

(一七八)×(三)×(一)〇二一

上端は折れ、下端は削りによる。左右両辺は削裁されているため、上

(一五二)×(九)×五〇八一

部は文字の一部分が確認できるのみ。筆の刺れが著しい。別筆部分は大振りだが、細めの筆面で墨色が濃い。平城宮跡から「太豆・大豆一斗八升」と記す木簡が出上している（奈良国立文化財研究所、一九八二）【平城宮発掘調査出土木簡概報（5）】。「太里」は那賀郡大野郷の地名で、史料には「太郷」ともみえる。延喜式民部省式には、阿波国の交易雑物に「大豆八十石」とみえている。V層出土の木簡。

一九〇号木簡

「く官人」[未替]

一二五×一四×五 ○三三

完形。上端は切断後に表裏両面から削り、縦の断面が山形になるよう整形されている。下端は裏面からの切り折りとみられる。左右両辺は削り。上端に切り込みを施している。切り込みは、台形状に入れようとした比較的丁寧なものである。「[]」は「用」「動」などの可能性がある。国衙の膳所で、未使用または不使用の「未替」容器に付けた付札であろうか。V層出土の木簡。

一九一号木簡

「」

一四五×二二×七 ○一

上下両端は切断、左右両辺は削りによる整形。四隅とも二次的に整形の可能性がある。V層出土の木簡。

一九三号木簡

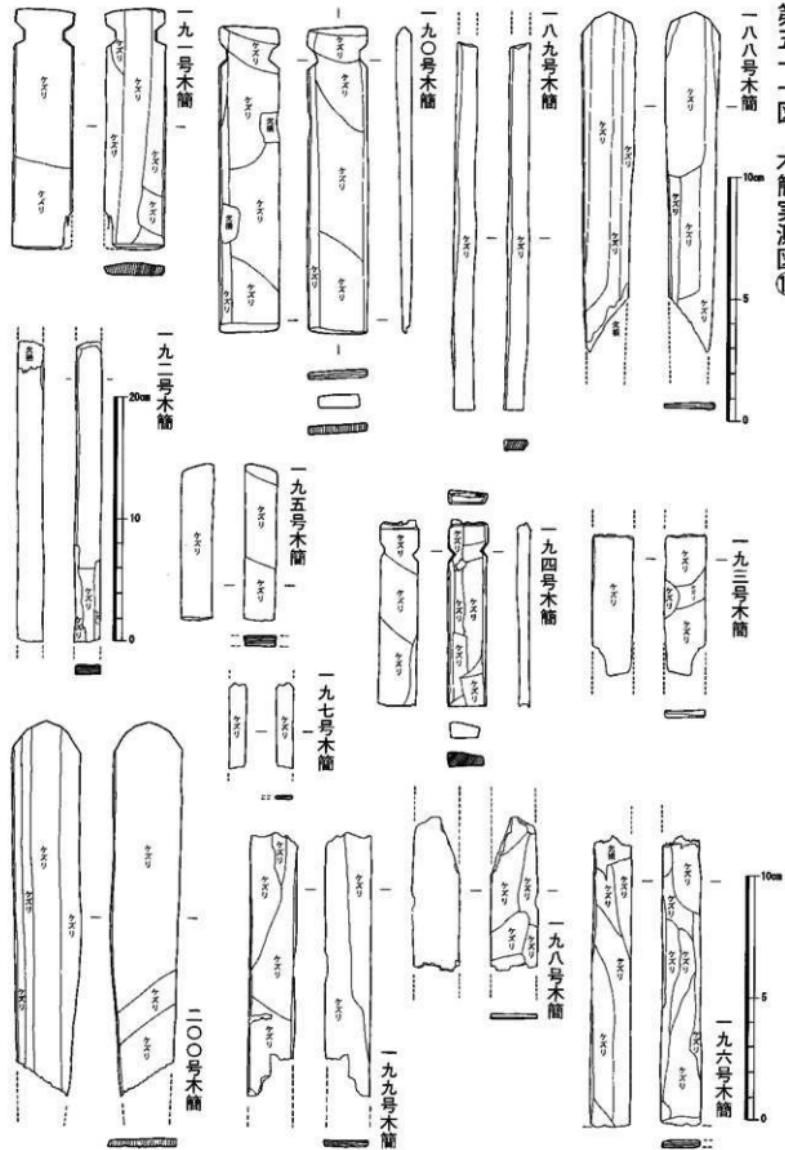
「新[]鋪マ鳴」
〔井カ〕

（五七）×一七×二 ○一九

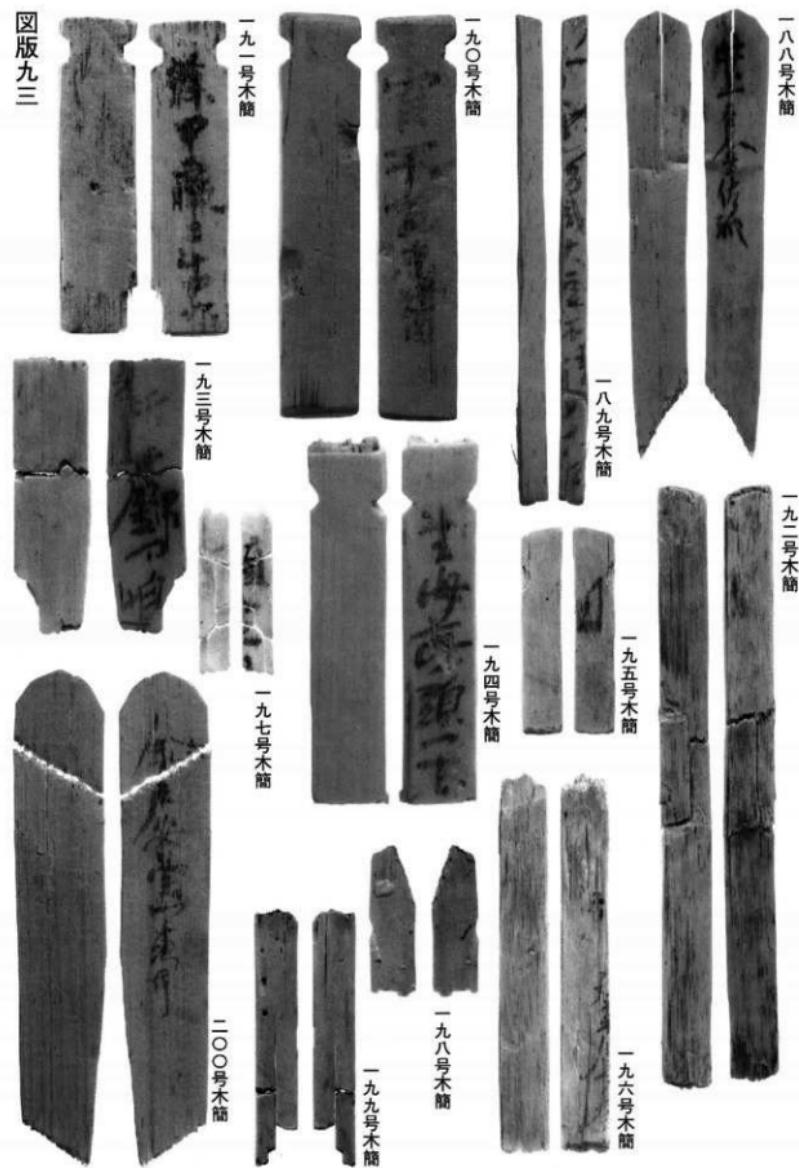
一片が接合する。上端は切断。左右両辺は削りにより原形を留めている。下端は折れている。「新井」は、阿波國名方郡内の郷名「高山寺本」和名抄では「迹比井」、刊本では「爾比井」、あるいは勝浦郡新居（高山寺本）「迹比乃井」、刊本では「爾比乃井」と読みを付す郷。「鋪マ」は五四号木簡（甫）にほぼ完形。左辺下部のみ僅かに欠損している。切り込みは台形状を呈し、阿波國の贋の特徴を示す。ウニの付札。文字面には継長の削り面が

あるが、裏面はほとんど整形されていない。全体に塗みが著しく筆面を追いく。ウニの付札は数量を記さないもの（奈良国立文化財研究所、一九六六）【平城宮木簡一】、六や、土器量位のものが多い。数量を記すものは升計が唯一で（同上、一九九〇）【平城宮發掘調査出土木簡概報（2）】、一斗四升は異例に多い。阿波國のウニについては、一四九号木簡を参照。V層出土の木簡。

第五一一図 木簡実測図(2)



圖版九三



所在の新島庄に「錦部志止様」がみえるので〔大口本古文書〕四一〇

六、本木簡は名方郡新井郷とみるべきだろう。「郷名十人名」の〇五一型式の付札の断片である可能性が高い。V層出土の木簡。

い。V層出土の木簡。

一九四号木簡

「く生海藻頭一古」

七六×一六×六 ○三一

完形。上端は表裏両面から刃を入れた切り折りによって切断されている。下端と左右両辺は削りによる整形である。上端に切り込みを施している。文字面には細かな削り面がみられる。生のメカブの付札。「古」は籠の意。海藻に関わる木簡として、一八号木簡〔南〕に〔海藻一籠〕、五八号木簡〔南〕に「交革布」がみえる。また、平城宮跡出土木簡に「阿波國進上御質若海藻毛籠板野郡牛屋海」〔奈良国立文化財研究所〕一九六〇年。

□
〔殖栗鷹カ〕
□□□長泰

一九六号木簡

(一九)×(一六)×三 ○八一

上端は折れ、下端は二次的整形の可能性がある。左辺は原形を保つが、右辺は割れている。両面ともに継長の削り面がみられる。文字は右辺下部にみられるが、木簡が文字の中から割離されているため、偏のみが残存している。「殖栗鷹」については一三四号木簡を参照。V層出土の木簡。

一九七号木簡

〔二〕

(三五)×(七)×一 ○八一

薄い小破片の四片が接合する。上下両端は折れ。右辺は原形を保つが、左辺は割れている。上端は下から上に向けて表面が削り落とされている。一文字目は「直」が読み取れるが、偏が付く可能性が高く、「殖」などが考えられよう。V層出土の木簡。

一九五号木簡

□

六五×(一三)×四 ○八一

上端は削り、左右両辺は削裁されている。下端は切断によるが、二次的整形の可能性がある。記号のような墨痕が明瞭に残るが、秋葉でできな

一九八号木簡

□

(六二三)×一九×一〇八
上下両端折れ。左右両辺は削りであるが、右辺は二次的削りの可能性がある。文字面には複数の削り面があり、僅かに墨痕がみられる。V層出土の木簡。

一九九号木簡

□ □

(一〇八)×一九×一〇八

上下両端は折れ、左右両辺は削り。右辺は二次的削りの可能性がある。

両面に縱長の削り面がある。僅かに墨痕が残るが訛説はできない。V層出土の木簡。

二〇〇号木簡

「余」安曇馬東方居

(一五三)×二八×三〇一九

上端は削りにより稜のある円頭状に整形され、一八八号木簡と類似した形状である。下端は欠損している。左右両辺は削り、左辺下部は僅かに斜めに削りだしているため、下端は尖っていた可能性が高い。文字面の整形は粗く、裏面に削り面が多く残る。「郷名十人名」の〇五一型式の付札の断片か。観音寺遺跡出土木簡には「郷」を省略する事例が多い。

二〇一号木簡

〔淡川國々〕

〔阿波國日高郡出京〕
〔後今月廿二日賀信依麻古印當都母母使人共依致之欲ニ至多留他
〔今月〕
〔後先遣前仍注事付使總意の故謀〕

〔今月〕
〔方〕
〔阿波國日高郡中勤務者人某夫大宅年式治郎下名方郡殖農等戸主妻人女入植邑口「名
〔光〕」

五七九×(五〇)×五〇八

上下両端と左辺は削りにより原形を留めているが、右辺には削りはみられず、割裁されたものと考えられる。上下両端とも右辺に向かって広がる面縮状を呈し、折敷などの木製品を木簡として再利用した可能性もある。埋没後に中央部が湾曲し、上部に折れが認められる。両面とともに多数の削り面で構成される。上部に細かな削り面がみられるが、下部は縦長の面で構成される。裏面中央部には、左上から右下方向への平行な

本例もそうした事例で余戸郷の意。刊本の「和名抄」には板野郡に金戸郷がみえ、余戸郷の誤りの可能性が大きい。また勝浦郡にも餘戸郷がみえている。九三号木簡に「安曇農主」、一一四号木簡に「名東郡人安曇維見」がみえるほか、「名方郡佐渡郷刀林阿曇部古麻呂」(木簡学会一九九八「木簡研究」第一〇号)、「那智郡幡屋郷海郡里口主阿曇部大鷗」(木簡学会一九九〇「木簡研究」第二二号)がみえている。余戸郷との関わりでいえば板野郡余戸郷か。V層出土の木簡。

線状痕が連続している部分があるが、これは板を割った際に付いた刃物傷の可能性がある。部分的に消えており、表面の整形によって刃物傷が削り取られたと考えられる。板は表面からみて左辺は薄く、右辺は厚い。

V層出土の木簡

二〇一号木簡（勘籍木簡）

本木簡の形状には、次のような特色がある。

- (1) 上・下端ともに整形面を残す、長さ五七・九cmの長大な木簡である。
- (2) 表の右側辺は削裁されており、もともとは六cm前後の幅だったらしい。
- (3) 両面ともに何度も削られた痕跡があり、表面からみて左半分は薄くなっている。右側辺が五・四mmの厚さであるのに対し、左側辺は一・五・一・五mmで、〇・八mmの薄さの所もある。
- (4) 前項の(3)とも関わることであるが、裏面の中央上部に「」で示した削り残しの部分がある。

1)～(4)の特色を踏まえると、本木簡は長さ二尺(一尺は一九・七五cm前後)、幅一寸の大型木簡で、以下の類例からみると、公用に供される木簡を利用して、国衙内で公文書の案文(下書き)を習書した際のものと推測される。

これまでに出土した大型木簡の幾つかを列挙すると、滋賀県鴨遺跡出

土の、刈り取った幅の数量を口」と記した貞觀十五年(八七三)の木簡(二六六・五四)(木簡学会一九八〇「木簡研究」第一号)、長屋王邸跡から出土した都郡水室に關わる和銅五年(七・一)の木簡(二二五四)(奈良國立文化財研究所一〇〇一「平城京木簡」二)、藤原宮跡にあつた宮所庄の弘仁二年(八一〇)の帳簿木簡(長さ九八・一四)(木簡学会一九八三「木簡研究」第五号)、平城京の東三坊大路側溝から出土した、九世紀初頭の告知札(長さ八七・六四)(木簡学会一九九四「木簡研究」第一六号)などがある。

それぞれ五尺八寸、四尺二寸、三尺三寸、一尺九寸に相当する。これらは、文書化する際に必要な備忘・メモとして書き継がれた記録木簡であり、また不定多數の人々に情報を伝える告知札(近世の高札に相当する)であつたから、自ずから長大な木簡が必要としたのである。

一方、公用木簡(公文書に使用された木簡)には、一尺八寸前後のものとして、滋賀県大津市の北大津遺跡から出土した大智朝の官義木簡(木簡学会一九九〇「日本古代木簡選」岩波書店)、兵庫県山量遺跡出土の、水田の稲数を記した八世紀初頭の木簡(木簡学会一九九八「木簡研究」第二〇号)、二尺二寸前後のものに、平城宮跡の下層から出土した藤原京時代の過所木簡(木簡学会一九八〇「木簡研究」第一号)がある。音義木簡や過所木簡も、多くの人々の目にふれるところから、長大であることが要求されたのだろう。近年、その存在が明らかとなつた歎木簡も同様に考えられる。

長さが二尺前後の公用木簡が出土していて、注目される。兵庫県夷狹遺跡出土の「國府」木簡(「府」は「符」の誤り、もしくは通用か。五cm。折損している)(木簡学会一九九七「木簡研究」第一九号)、福

島県荒田日条里遺跡の「郡符」木簡（五九・一四）（木簡学会一二〇〇）

二「木簡研究」第二四号）、新潟県八幡林遺跡の「郡司符」木簡（五八・五四）（木簡学会一九九一「木簡研究」第三号）、兵庫県吉田南遺跡（明石郡家と推定）出土の「播磨國移」と記す木簡（五九・四四）（木簡学会一九九〇「日本古代木簡遺」岩波書店）などである。本木簡も、これらの公用木簡に準じるものとみてよい。

本木簡には、裏面中央上部の削り残しの部分を除けば、三通の案文を記す。表の面にみえる「阿波國司牒」で始まる一行の案文（Aとする）、裏面の「已畢」で始まる案文（Bとする）と、「阿波國司解」で始まる案文（Cとする）である。

問題はA・B・Cが同筆か否かという点であり、本木簡の内容を理解する上でもきわめて重要である。書体・書風をどのように見るのか、見解の分かれるところであろう。そのため訛文では断案を下さずに表記を避けているが、当初から訛読作業に従事してきた者として、筆者（和田）はCを別筆とする判断に傾いている。

AとBは訛痕が全体的に薄く、文字はCに比しやや大き目で、書風も柔らかな印象を受ける。またAとBで共通する文字と語句、例えば國・依・若・故や「已畢」・「事狀」を比較すると、同筆とみてよいと思われる。一方、Cは愚狼が濃く、文字はやや小振りで、書風も凹みを欠き鋭角的である。A・Bに共通する文字と語句として、人・郡・戸や「阿波國」があるが、明らかに別筆である。したがってAとBは同筆とみてよいが、Cは別筆と判断している。ただしAとBは同筆であるものの、Aの文末が「故牒」で完結しているのに対し、Bは「已畢」から始まつており、明らかに前文を欠く。理由は不明であるが、その内容は戸籍に

関わっており、その意味ではCとも関わりがある。

次にA・B・Cの内容を検討する。

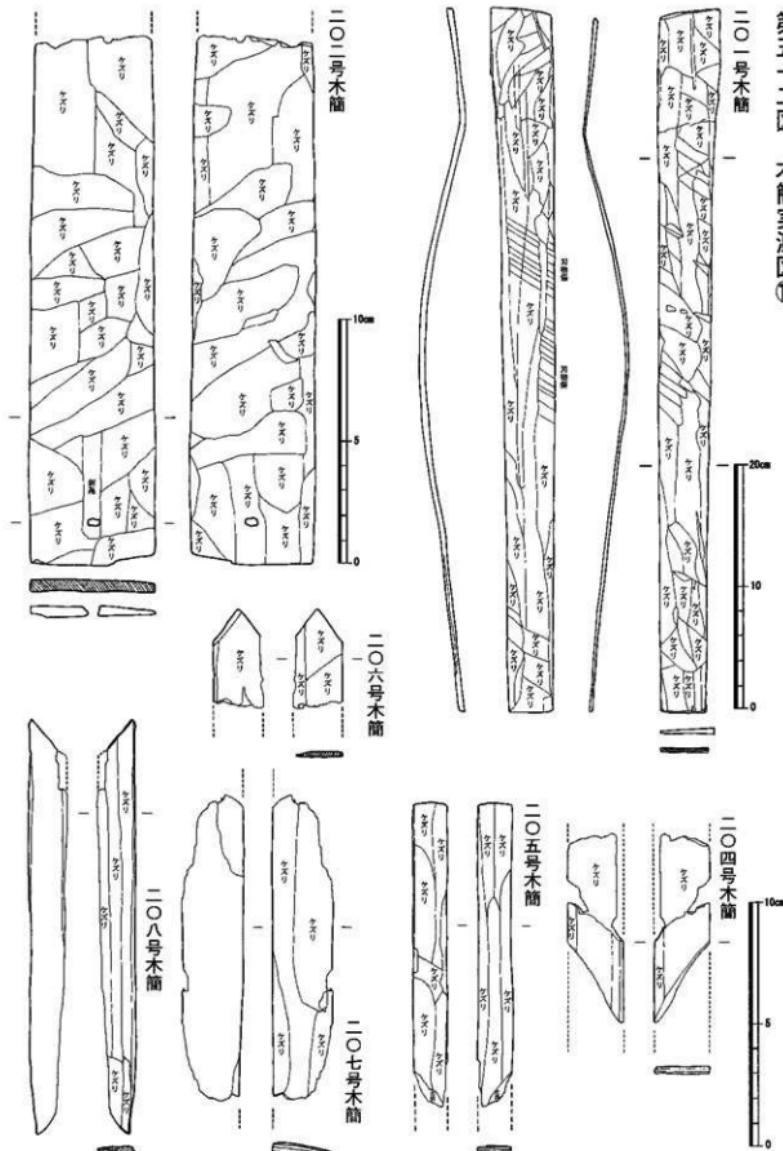
Aは「阿波國司牒」で始まるが、保存処理にともなう木簡訛文の再検討により、牒の宛て先が淡路国である可能性が浮かび上がってきた。しかし牒の宛て先の主体がよくわからないため、文意が判然としない。阿波國司は、淡路国の土体からの牒旨に基づき、当郡司（阿波國那賀郡司か）と使人（那賀直綱麻呂）に命じて、徵收させることが出来たとみえるので、その主体は阿波國那賀郡に何らかの権益を有していたかと推測される。王臣家の庄園、あるいは社寺の封「などを想定しうるかもしれない。那賀直綱麻呂は那賀郡司の一族だろう。

BはAと同筆と判断されるが、内容は異なる。ある人物の本籍を、阿波國から平城京内に移したいとの解状の趣旨に基づき、阿波國司は国衙に保管する戸籍を調査させて、本籍に間違いないことを確認し、その旨を記した書状を佐伯費大長に附して、淡路国に移すとの内容である。これも勘籍に関連するものであり、Cとの関連がうかがえる。

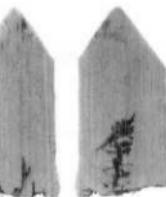
Cは、平城京で資人して任用されたか、あるいは既に資人として働いていた秦人マ大宅について、民部省から阿波國司に照会があつた。それで国衙で保管されていた戸籍に基づき、國司はその年齢・本籍・戸主などを、解文で民部省に上申したものであり、勘籍にあたる。正倉院には勘籍に関する文書が九通残されているが、木簡で確認されたのは本例が最初である。まことに貴重な木簡である。

これまで觀音寺遺跡では、「板野國守」と記す木簡や「波尔五十戸税」などと記した木簡が出土し、阿波國府の国衙に近いことが確認されていて、この勘籍木簡の出土により、木簡出土地近くに阿波國衙の所在し

第五一二図 木簡実測図(13)



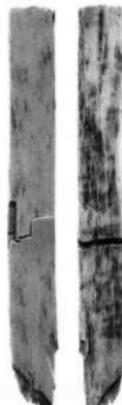
二〇一号木簡



二〇二号木簡



二〇三号木簡

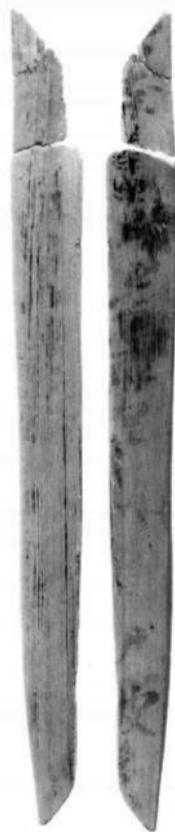


二〇四号木簡



二〇七号木簡

二〇八号木簡



图版九四

ていたことが確実になつた。また中央政府と阿波國との間で、勘定の手続

きが実際に行なわれていたことを、木簡で確認できるという希有の事例となつた。観音寺木簡のもつ歴史的意義の大さきを如実に示すものと言えよう。

二〇三号木簡

「く。阿波國大賛■■大」進□
〔賛〕〔大〕

(一)(一)(六)×三(三)×二 ○一九

上端と左右両辺は削りによる整形で、下端は折れている。墨没後に変形し、中央部で屈曲している。上部には切り込みが施され、中央に穿孔がある。左辺下部に斜めに削る痕跡があり、下端を尖らせる○三二型式の可能性もある。四字目の「大」は第一画が極端に短く、また「賛」も

「貝」がみえない。書き損じたものか。V層出土の木簡。

- ・ 秦 □解 解解右有
- 稻足一斗 解解解解解解
- 〔秦カ〕

二〇二号木簡

「久四人」

(一)(一)(六)×五(一)×五 ○一九

上端折れだが、下端と左右両辺は削り。下部中央に穿孔がある。両面ともに細かな削り面で構成され半坦ではない。凹面状の削りが連続し、ヤリガンナのような刃物で削つたと考えられる。厚さは均一ではなく、下部の穿孔部分は特に薄くなっている。表面三行目上端の□〔秦カ〕とした部分は、「一斗」の可能性もある。「解」はいずれも習書。木簡の上部に合計記載があり、「解」の文字があつたことに基づくものであろう。裏面には他にも文字として読み取れない墨痕がある。「秦」については二三四号木簡参照。V層出土の木簡。

二〇四号木簡

□佐波

(七七)×一(一)×二 ○八一

二片が接合する。下部の左右両辺には削りが残るが、上部の大半部分と下端は欠損である。「佐波」は人名か。VI層出土の木簡。

とした部分は、「一斗」の可能性もある。「解」はいずれも習書。木簡の上部に合計記載があり、「解」の文字があつたことに基づくものであろう。裏面には他にも文字として読み取れない墨痕がある。「秦」について

二〇五号木簡

〔殖業語カ〕
〔□□〕マ佐留

(一)(一)(四)×一(四)×四 ○一九

上端と左右両辺は削り。下端折れ。二片が接続する。一文字口は「殖」とみて残画に矛盾はない。「郷名+人名」の付の可能性が高い。ただ、

そう考えた場合、一文字目の上部にやや余白があることになり、書き出しの高さに不自然さは残る。「蘿栗（郷）」については「三四四号木簡」を参考。「語部（マ）」は延喜二年の「板野郡田上郷戸籍」にみえる。^{VII} 層出土十の木簡。

一〇六号木簡



(四〇)×(一〇)×(一) ○一九

上端は山形に削る。下端折れ。左右両辺削り。裏面には現状では蠟痕は確認できず、剥離の可能性もある。当初四文字とみて、「一・三文字目」「天平七」の可能性を考えていたが、「一〇八号」の別筆部分と酷似しており、上邊を鋭く尖らせる形状から肅串の可能性が考えられる。文字も年号ではなく、肅串としての用途に伴うとみる方がよいと思われる。^{VII} 層出土上の木簡。

一〇七号木簡

「彼里人

(一一四)×(一一四)×五 ○八一

上下両端は折れ、右辺は割れ。左辺のみ原形を留めている。文字面には綫長の削り面が残るが、裏面は剥離している。左辺から右辺に向かって薄くなり、削離状を呈する。大振りな文字で記される。左辺上部の斜めの部分は、切り込みの痕跡の可能性がある。里名から書き出す付札の

一〇八号木簡

「奈」 [□□□] □□□ □皮□

六九×一六×三 ○八一

四周すべて、一次的整形。下部はやや細く削り出す。その上、上下両端とも左辺から削つて尖らせる。一片接続。別筆部分の一文字目は「奉」または「秦」、一文字目は「史」または「米」の可能性がある。「皮」は偏が付く可能性もある。木簡を二次的に整形して肅串に加工し、別筆部分を記したとみられる。別筆部分は「一〇六号」と酷似する。類似した機能をもつ木簡とみるべきであろう。^{VII} 層出土上の木簡。

一〇九号木簡

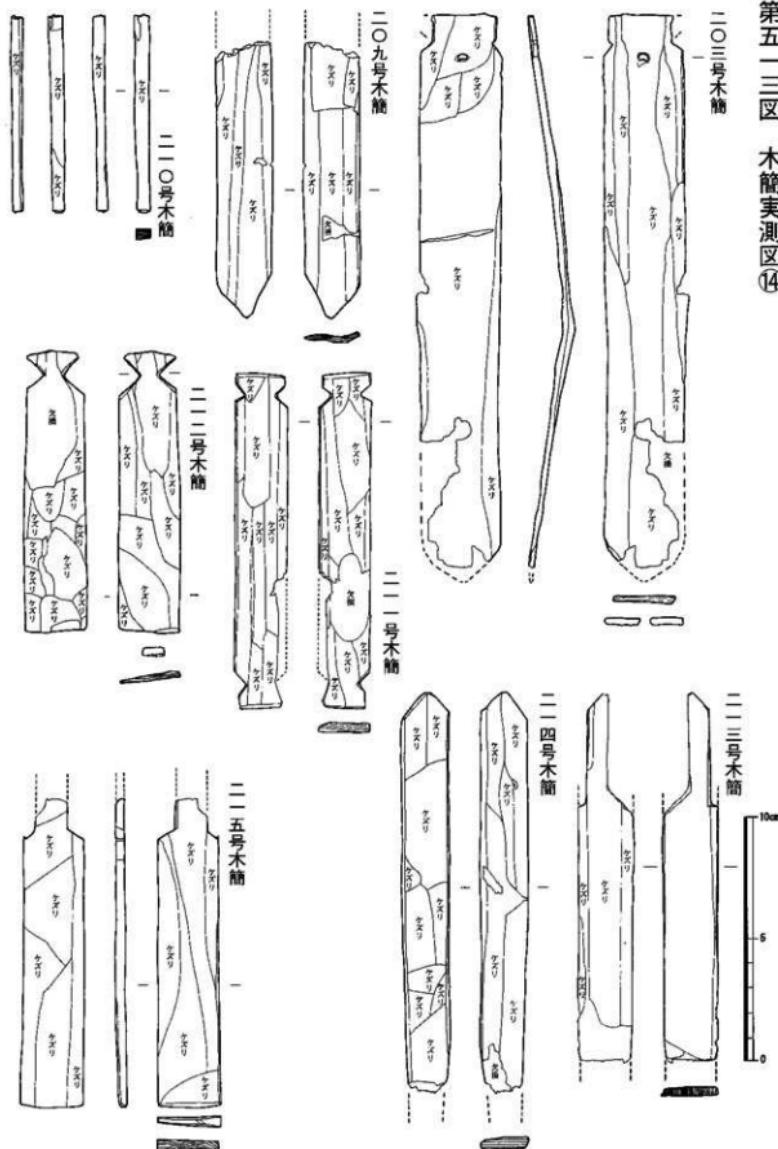
〔生・大方昌カ〕
□□□□

(一一一)×(一一)×四 ○五九

上端折れ。左右両辺削り。下端は左右両辺から削つて尖らせる。三片接続。二文字目は「郷」の可能性がある。下部は人名とみられ（王生大万昌か）、「郷名十人名」の付札の可能性が考えられる。「王生」は「生王」、「生」とも略記される。^{VII} 六号木簡を参照。^{VII} 層出土上の木簡。

可能性がある。「彼」は乙類の「ヒ」として用いられるが、「和名抄」にみえる阿波国の郷名で該当するものはない。^{VII} 層出土の木簡。

第五一三図 木簡実測図(14)



二〇三号木簡

簡牘國人燃

也

其

其

二〇九号木簡



二一一号木簡



二一二号木簡



二二二号木簡



二二五号木簡



二二三号木簡



圖版九五

二一〇号木簡

〔代カ〕
□
海石

八・×五×四 ○一

四周すべて二次的整形で、一六〇号木簡、一六四号木簡と同様に、算木とみられる木簡に類似する。木簡を算木に二次的に整形した可能性が高い。□〔代カ〕とした文字は旁のみ残る。「和名抄」によれば那賀郡に海部郡があり、平城宮跡出土木簡に「那賀郡幡羅郷海部里」（奈良國立文化財研究所一九九〇『平城宮発掘調査出土木簡概報22』）がみえている。海部・海マについては、一四・弓木簡や、七三号木簡にみえるほか、板野郡に海部の分布がみられ（同上①）、名方郡には海直もみえている（『日本三代実録』貞觀六年八月八日条）。埋層出土の木簡。

二一一号木簡

〔櫻間里小〕 斗く

一・三八×一・一×四 ○三

中央部を欠損し、二片が接合する。左辺下部は割れているが、上下両端に切り込みをもつ付札である。両面ともに縱長の削り面で構成されるが、下部は傷みにより数字にあたる一文字分の墨痕が欠落している。品目の一文字目は上端の「一」部分のみが残り、「麦」の可可能性がある。「櫻

間里」は阿波國名方郡内の里名。里制下の木簡。櫻間の地名については一四八号木簡を参照。平城宮跡出土木簡に、「阿波國阿波郡小麥」「宝龜七年」と記すものがあり（奈良國立文化財研究所一九九〇『平城宮發

掘調査出土木簡概報23』）、また延喜式部省式に、阿波國の交易雜物として「小麦七十石」が記されている。IX層出土の木簡。

二一二号木簡

〔木〕（重書）
・「木」
三間三間間
・「木」
□□□

一・五×一六×一 ○二

完形。上部に切り込みをもつ。切り込みは木簡の幅三分の一定程度に及ぶ、深く大きなものである。両面ともに細かな削り面によつて構成されている。特に裏面下部は細かな削りによつて整形され、薄くなっている。付札の文字を二次的に削つて書寫したものか。表面の文字で「三間」は阿波國美馬郡のことか。双讀した文字以外にも全体にこれらと重なる墨痕がある。裏面の一、三文字目は同じ文字。飛鳥池出土木簡に、「三間評小豆」
と記すものがある（奈良國立文化財研究所一九九八『飛

鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報23』）。SR四〇〇一（IX層に対応）出土の木簡。

二二三号木簡

□□□
〔留カ〕
□

（一五一）×（一三）×四 ○六五

上部は左辺二分の一と右辺を欠損し、下端は切断されている。左右両辺は削りにより原形を留めている。両面に僅かに墨痕があるが、訛読はできない。SR四〇〇一（X層に対応）出土の木簡。

二一四号木簡

「鴨里漢人マ□□□□□」

（一六四）×（一〇）×五 ○一九

上端は左右両側からの削りにより山形を呈する。下端は欠損している。左右両辺は削りにより原形を留める。左辺下部が僅かに斜め右下に削られているため、「郷名十人名」の〇五一型式の付札の断片である可能性が高い。両面ともに細かな削り皿がみられるが、文字面よりも裏面の方が、半撫に整形されている。「鴨里」は阿波國名方郡内の里名。里制下の木簡。五四号木簡（南）は、「鴨里錦部鹿津奉上人刀」と記し、上端部は山形を呈し下端部を尖らせていて、本木簡と形状が似ている。一八八号木簡に「櫻間漢人福縁」、一七四号木簡に「漢人郷」がみえている。SR四〇〇一（X層に対応）出土の木簡。

二一五号木簡

「V土簡里米一石口金」

（一六六）×（一六）×四 ○一二

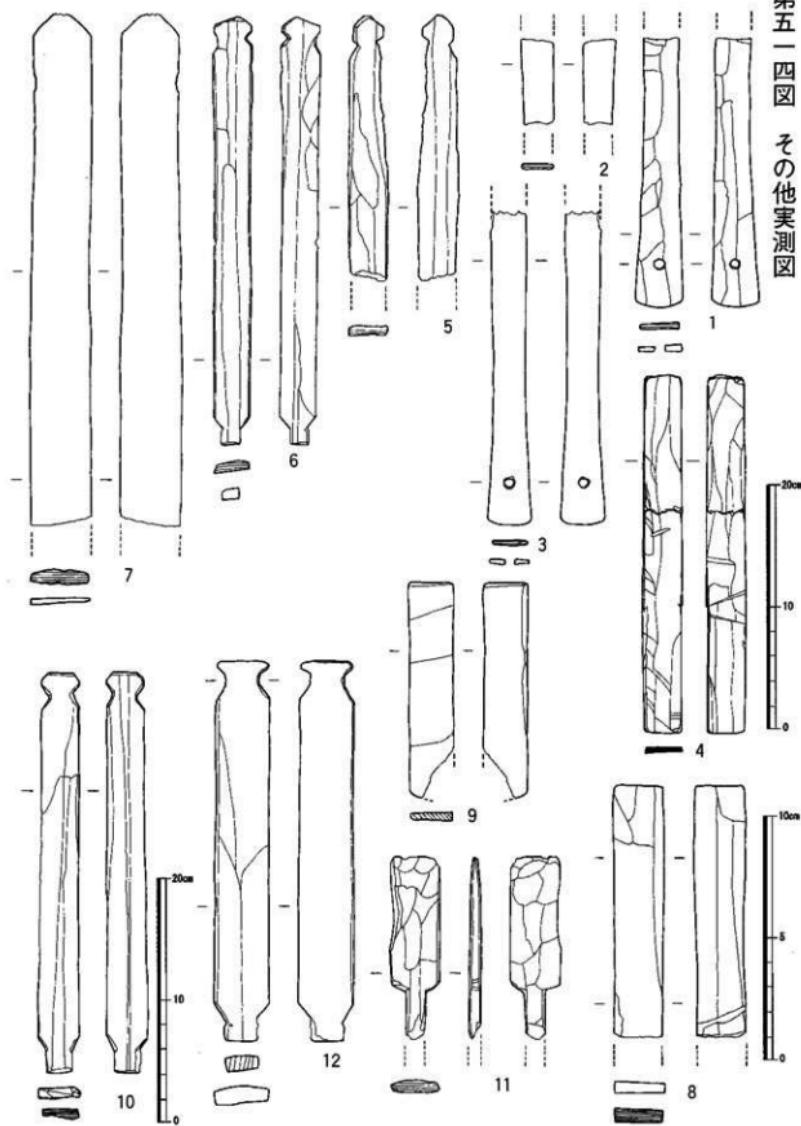
四周は原形を留めるが、上端の切り込み部分を欠損している。両面ともに綫長の大きな削り面で構成されている。墨痕は薄く、赤外線写真にも

よつて文字が確認できる。里名のみの米の付札。「十師里」は阿波國名方郡内の里名。「日幸」は名前の可能性があるが、不詳。「全」は「奈」の可能性もある。里制下の木簡。平城宮跡出土木簡に、「阿波國名方郡上師郷士師部廣友」（奈良國立文化財研究所一九八一「平城宮発掘調査出土木簡概報」）がみえている。SR五〇〇一（X層に対応）出土の木簡。

三 その他

加工状木片で、その形態や表面の削りは木簡と共通しているが、墨痕が認められないもの、または未製品、木簡の可能性を残すものをここに掲載した。第一分冊では文房具の木札として分類したものと同じ範疇に入る。一・二・三は檜扇に記号を墨書きしたものである。類似したものに一〇四号木簡があり、記号の様なものが墨で描かれている。五、六、一〇、一一は〇・三型式の付札の可能性があるが墨痕はみられない。一〇は長さ三・一・六cmの大型であるが、裏面が整形されておらず未製品の可能性が高い。四、七、八、九は表面の削りが細かく、木簡と共通するものと考えられる。一・二は頭鏡軸の頭鏡部分であるが、両面の削りは非常に細かく、断面形状は先端ほど薄くなっている。

第五一四図 その他実測図



図版九六



III まとめ

一 観音寺遺跡出土木簡の年代について

木簡の出土した場所が特定時期に埋没した遺構とは異なり、自然流路の堆積層は埋没後に擾乱され、必ずしも元位置を保っていないことが想定される。これは他の遺物の出土層位を検討した結果、各層にかなりの時間幅がみられるところから明らかである。しかしここでは、木簡の年代を個々の木簡が出土した自然流路の堆積層の年代にしたがつて想定し、大きく3つのグループ（群）に分類した。

観音寺遺跡では、八世紀前半以前の層位を一部に調査しているが、大半は八世紀中頃の層位が掘削限界となっているため、層位的な木簡の分布は条件を一定としていない。その前提で木簡の層別出土数（表二二）をみると、八世紀後半を主体とするV層からの木簡が圧倒的に多く、一〇世紀から一世紀初頭のIII層までに多いことがわかる。年代を直接的に示す紀年銘木簡は三点出土した。「一八二」号木簡の天平勝寶二（七五〇）年、「一二七号木簡の天平寶字八（七六四年）、「一八一」号木簡の延暦二（七八四）年である。いずれも八世紀後半の年号であり、V層からの出土である。さらに年代が押さえられるものに、「名東郡」と書かれた「一四」号木簡が挙げられる。名東郡は寛平八年（八九六）年に名方郡が名東郡、名西郡に分離されたため、それ以降の木簡とみられる。この木簡が出土したIV層は九世紀後半から一〇世紀前半の年代が想定されている。ま

B群は八世紀半ばから九世紀前半の年代が与えられる。紀年銘木簡を二点含む「一二一」号木簡から「一二〇」号木簡である。最も多くの木簡が含まれるが、その種類も「勅語」をはじめとした文書、付札、習書など多様で、観音寺遺跡の木簡群の中核をなしている。このうち「一九八」号木簡から「一二一」号木簡までは、共伴遺物から、八世紀中頃の時期を想定している。

B群には、地名が書かれた付札が多く含まれている。その大部分は名方郡内の地名が書かれたものである。「郷名十人名」で、「郷」の文字を省くものが多い傾向がみえる。一方で、他の郡のものは僅かに一点にとどまっている。これらのことから、出土した付札は国衙に納められたもの

た、地名の表記からみると、「里」表記の木簡はIV層から出土したものに限られる。それより上層のものは、「郷」表記であることから、少なくとも郷里制以降の木簡であると考えられる。ただし、「郷」の文字が省略されているものが多いことから、木簡のみで判断することは不可能である。以上の点を考慮して、年代別にまとめるとき、大きく分類して、明確に「里」表記をもつIV層のA群、紀年銘木簡を含む八世紀後半を中心としたV層のB群、九世紀後半から一〇世紀初頭のIV層・III層のC群に大別される。出土層位のⅣ層からVI層に含まれるのは明確にA群に属するとは言えず、B群の古段階に位置付けた。よって観音寺遺跡で最古段階のA群は「一二一」号木簡から「一二五」号木簡の五点となる。ただし、そのうちの四点はSR三〇〇の北側に隣接したSR四〇〇・SR五〇〇一からの出土であり、SR三〇〇では一二〇〇年の調査で出土した「一二一」号木簡のみである。掘削可能であれば出土した可能性のある時期の木簡群で、八世紀前半以前の年代が想定される。

B群は八世紀半ばから九世紀前半の年代が与えられる。紀年銘木簡を二点含む「一二一」号木簡から「一二〇」号木簡である。最も多くの木簡が含まれるが、その種類も「勅語」をはじめとした文書、付札、習書など多様で、観音寺遺跡の木簡群の中核をなしている。このうち「一九八」号木簡から「一二一」号木簡までは、共伴遺物から、八世紀中頃の時期を想定している。

のと考るよりは、名方郡家に納められた際の付であると推測され、国衙と名方郡家の併設を想定させるものと考えられる。

C群は九一号木簡から一二〇号木簡である。共伴する土器から九世紀後半から一世紀初頭の年代が与えられる。名東郡と書かれたものが含まれる。字体がくずれたものや、檜局に墨書きしたものが多い特徴がある。その他、八七号木簡から九〇号木簡は、中世以降昭和までの木簡となる。特に現代の古洗川の堆積から出土した木簡は近世から昭和のものを含んでいた。これらは調査の最初の段階で、偶然採取した木片に墨書きがみられたものである。

二 木簡の形態について

出土した木簡の型式を、奈良文化財研究所に従つて分類した結果、表二三のようになつた。各層の木簡の特徴を、IV層から記述する。

最下層のIX層段階からは五点の木簡が出土している。このうちSR三〇〇からは一二号木簡の一点のみである。SR三〇〇一から出土した木簡で唯一「里」表記の付札で、上下に切り込みが施された〇三二型式である。これと同時期のSR四〇〇一、SR五〇〇一の木簡では、一二四号木簡、一二五号木簡に「里」表記のものがみられ、一二五号木簡は〇三型式であった。

唯層から出土した木簡は一二〇号木簡のみである。木簡を細く削ぎて算木状に加工したもので、文字の一部が残存している。唯層は五点の木簡が出土している。調査区の南東部に存在する層から出土したもので

表23 木簡型式別出土数

	011	019	031	032	039	049	051	059	061	065	081	合計
近世以降	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
II層	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
III層	1	2	0	0	2	0	0	1	6	0	9	21
IV層	1	3	0	1	1	0	1	0	1	1	10	19
V層	10	9	2	6	4	1	11	3	1	1	25	73
VI層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1
VII層	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	2	5
VIII層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
IX層	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	1	5
合計	14	17	3	9	7	1	12	5	9	3	49	129

ある。一二〇号木簡は圭頭状の薄い木簡に文字がみえるが、大部分は欠損している。この層には完形のものはない。VI層の一点も形状不明の破片であった。

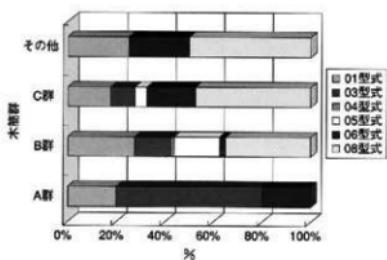
V層は、最も多くの木簡が出土した。〇一・〇三・〇五型式のものが多。〇一型式の木簡は、文書木簡などの用途が考えられ、七三点中一九点を占める。「天平勝寶二年」の紀年銘をもつ一二五号木簡などが含まれる。これ以外にも「天平寶字八年」の紀年銘の一二七号木簡は、上部と左辺が割れているため〇八一型式としたが、本来は一二五号木簡と同様の〇一型式の木簡と考えられる。一二一号木簡も上部が若干湾曲し、縦に削裁されているため〇八一型式としたが、〇一型式の可能性もある。一二一

号木簡は、小片に割れているため○八一型式としたが、両面に文字があり、内容からも文書木簡であることがわかる。○三型式は切り込みが施された付札である。末端形状の不明な○三九型式を合わせると二点が含まれる。一四九号木簡の「御贊」は、上下両端に台形状の切り込みがあり、平城宮跡出土の御贊木簡と形状が共通し、阿波國の贊に特徴的なものと考えられる。木簡の両面は丁寧に削られており、極めて細い筆で書かれている。一九〇号木簡、一九一号木簡の切り込みにも同じ特徴がみられる。○三一型式の一八七号木簡も両面に細かなケスリ面があり、丁寧な整形の印象を受けるが、文字は太く雑に書かれている。○五型式は長方形の木簡の一端を尖らせたもので、これも付札の一種であろう。一四点の木簡が該当する。一六一号木簡や一七二号木簡は、薄く割った木簡の末端を尖らせたものに、郷名と人名のみが書かれている。一方、一七五号木簡のように、厚みのある木簡の両面を整形したのに、郷名と人名のみが書かれたものもある。末端が欠損しているため○一九型式に分類した一八八号木簡や一九三号木簡、二〇〇号木簡なども、この型式に分類されると考えられる。これら○三・○五型式の付札はⅤ層の木簡総数の三五%にあたり、国衙や名方郡家に納められた貢進物に付けられた付札が、SR三〇〇一に投棄されたものと考えられる。この他、一五〇号木簡は封緘木簡の未製品に習書したものであり、○四九型式に分類した。VI層以下では木簡の出土数は激減することから、SR三〇〇一に木簡が投棄された時期の中心はV層段階であつたと考えられる。

IV層出土の木簡は一九点である。半数は形状不明の○八一型式であるが、短冊形の○一型式がやや多い。題籠輪状の木簡に「白米處」と墨書きされた一二三号木簡、人形に墨書きのある一二二号木簡など、形態は様々

である。V層段階と比較すると、付札類の減少が顕著である。自然路路の堆積は継続しているため、木簡の投棄地点の変更などの可能性が考えられる。

III層から出土した木簡は合計二一点である。形状の不明な○八一型式を除けば、用途の明瞭な木製品に墨書きのある○六一型式が六点を占める。これは檜扇に墨書きしたものが多いのである。墨書きのある檜扇は、無いものと比較すると、幅が広い板を素材とする特徴がある。○一、○三、○五型式も、それぞれに少数ではあるが存在する。九三号木簡は曲物などの転用材を素材に木簡として使用している。一〇二号木簡は上部に切り込みが施された付札であるが、III層もIV層と同じように付札



第515図 木簡の型式別組成

類が少ない傾向がみられる。II層は角塔婆状のものなど、古世のものである。

最後に、各群別に含まれる木簡型式の組成を第五一五図に表した。最も下層のA群の木簡は五点で、数が少ないため比較の対象にはならないが、切り込みをもつ○三型式のものが多。B群では、八〇点の内の二〇%が○一型式となり、○五型式、○三型式と続く。○一型式は文書木簡、○三、○五型式は付札の可能性が高いものであり、国衙での使用を示す木簡群であることが想定される。C群では、四〇点の内の二〇%は○六型式で、○一型式がこれに続く。B群で多くみられた付札類は、ここでは○二、○五型式合わせても一五%にすぎない。○六型式は木製品に墨書きのあるもので、その多くは檜扇であり、B群とは性格の異なる木簡群である。

このように、B群とC群の間には木簡の組成に変化があることが明らかとなつた。これは、自然流路の流路の変化にも大いに関係があると考えられるが、國府内の建物配置の変化などを反映している可能性も考えられる。

表24 木簡

木簡番号	グリッドなど (調査区)	層位	法量 L (cm)	法量 W (cm)	法量 H (cm)	型式	木取	備考1 (残存部分 に関する情報)	備考2 (形状に関する情報)	表面の状態	X	Y	Z	出土状況
87	3-N G 3 (04-1)	II	14.8	5.4	0.6	011	板目	彎形。	上端中央部に摩耗有り。	滑らか				現在の香椎川の河道から出土。
88	3-N G 6 (05-2)	II	(15.5)	4.8	0.8	081	板目	右邊上部と左邊下部に欠損有り。	分厚い板の中央擦石有りに 沿うて2段の切り込みがある。 小型の角板状木製品。	滑らか				現在の香椎川の河道から出土。
89	3-N R 11 (05-1)	II	(9.5)	0.8	0.8	061	透材	下端折れ。	上端に2段の切り込みがある。 小型の角板状木製品。	やや粗い	118808.42	89852.082	4.777	
90	3-N M 17 (04-2)	II	(20.4)	4.1	0.3	081	板目	上端折れ。右辺削 れ。		滑らか	118860.976	89784.58	4.138	
91	3-N D 3 (04-1)	III	(14.6)	2.9	0.1	061	板目	下端折れ。	底く横広の椎形。	滑らか	118815.0917	89812.6613	3.9566	重なって出土。
92	3-N D 3 (04-1)	III	(18.3)	2.9	0.1	061	板目	下端折れ。2片接合。	底く横広の椎形。	滑らか	118815.0177	89812.6912	3.9561	重なって出土。
93	3-N P 4 (05-1)	III	22.5	6.7	0.7	011	板目	上端2次的彎形。	下端部を弧状に彎形。曲物 の底面などを軸用か。	滑らか	118827.643	89819.724	3.869	文字面が下向き。
94	3-N K 5 (03-1)	III	(5.5)	1.8	0.3	039	板目	下端折れ。	上端に切り込み有り。	滑らか	118827.789	89819.623	3.857	
95	3-N A-10 (05-1)	III	(17.4)	(3.1)	0.5	081	板目	上下山箇折れ。右 木筋を中央で削減したも の。	滑らか	118804.75	89846.01	3.956		
96	3-N C 7 (05-2)	III	(5.2)	2.5	0.1	061	板目	上下山箇折れ。	特厚の断片。	やや粗い	118813.943	89832.545	3.86	流れに直角。文字の書 き出しは北側から。文 字面が上向き。
97	3-N T 9 (05-2)	III	(19.4)	(1.3)	1.1	081	板目	上下山箇折れ。右 辺削りかけ。	厚手の板を半斜。側面を丸 く整形。	滑らか	118799.066	89842.833	4.028	流れに平行。文字の書 き出しは北側から。文 字面が下向き。
98	3-N B-8 (05-2)	III	(1.0)	19.6	0.2	081	板目	上下山箇折れ。	滑らか	118808.025	89839.821	3.762	流れに平行。文字の書 き出しは北側から。文 字面が下向き。	
99	3-N C-9 (05-2)	III	(23.5)	2.2	0.5	081	板目	上端折れ。		やや粗い	118810.203	89841.765	3.845	流れに直角。文字の書 き出しは北側から。文 字面が上向き。
100	3-N C-7 (05-2)	III	(11.6)	1.8	0.3	039	板目	上端折れ。	下端は左/右側面からの削 りで山筋を平する。	滑らか	118813.352	89832.047	3.803	
101	3-N B-9 (05-2)	III	(8.2)	1.3	0.3	019	板目	下端折れ。		滑らか	118806.754	89841.721	3.857	流れに直角。文字の書 き出しは北側から。文 字面は上向き。
102	3-N B-8 (05-2)	III	(8.7)	2.9	0.5	039	板目	下端折れ。	上端に切り込み有り。	やや滑らか	118806.672	89841.698	3.838	文字面は上向き。
103	3-N D-7 (05-2)	III	(30.5)	(4.5)	0.3	081	板目	上下山箇折れ。左 右两边削れ。		滑らか	118809.281	89836.13	3.769	流れに平行。文字の書 き出しは両側面から。文 字面が下向き。
104	3-N E-6 (05-2)	III	(13.8)	2.0	0.3	061	板目	上端折れ。	特厚の上端が折れたもの。 下端に要用の穴孔有り。	滑らか	118816.506	89833.584	4.048	流れに平行。斜めに突 き出さった状態。文字 の書き出しは東側か ら。文字面が下向き。
105	3-N B-9 (05-2)	III	(13.1)	1.6	0.4	081	板目	上下山箇折れ。		粗い	118805.580	89841.561	3.873	流れに平行。文字面が 下向き。
106	3-N F-6 (05-2)	III	(9.8)	1.6	0.3	081	板目	上端折れ。		やや粗い	118809.244	89836.07	3.757	字面が下向き。
107	3-N C-8 (05-2)	III	(5.1)	1.3	0.1	081	板目	上端折れ。		滑らか	118815.507	89833.476	3.777	
108	3-N C-8 (05-2)	III	(7.4)	1.7	0.2	061	板目	上端折れ。	特厚の断片。	滑らか	118820.067	89826.628	4.018	文字面が下向き。
109	3-N C-8 (05-2)	III	(17.9)	1.2	0.3	061	板目	上端折れ。	特厚の上端が折れたもの。 下端に要用の穴孔有り。	滑らか	118819.962	89826.643	3.929	
110	3-N C-20 (00-1)	III	(11.6)	2.4	0.4	019	板目	下端折れ。	上端は山形に整形。	やや粗い	118831.836	89796.711	4.032	
111	3-N T-15 (05-1)	III	(27.8)	3.4	0.3	081	板目	下端折れ。左辺 部欠け。		やや粗い				
112	3-N T-15 (05-1)	IV	10.0	(2.4)	0.3	081	板目	左右两边削れ。	裏面上面に3条の縦引根 があり。	滑らか				
113	3-N II-18 (04-2)	IV	18.6	(4.3)	0.7	065	透材	透材部分の左端の み削れ。		滑らか	118838.1094	89788.8037	4.1453	
114	3-N H-19 (04-2)	IV	37.2	(4.7)	0.7	081	板目	下端は一次的削 れ。左辺削れか。	厚手の板の上部に削れ。	やや粗い	118836.6554	89790.9416	3.872	
										滑らか	118836.7381	89790.9209	3.8501	

木 板 号	グリッドなど (調査区)	層位	法量 L (cm)	法量 W (cm)	法量 H (cm)	型式	木取	備考 1 (既存部分 に関する情報)	備考 2 (形狀に関する情報)		表面の状態	X	Y	Z	出土状況
									幅	高さ					
113	δ-N E-2 (04-1)	IV	18.4	4.0	0.9	011	板目	変形。			やや滑らか	118820.809	89813.506	3.859	
116	δ-N F-2 (04-1)	IV	(14.8)	0.8	0.4	032	板目	下端折れ。			滑らか	118825.501	89805.049	4.072	
117	δ-N D-3 (04-1)	IV	(8.1)	2.2	0.4	039	板目	下端折れ。	上部に深い切り込み有り。 裏面は削成している。		両面墨塗り	118819.717	89810.95	3.856	
118	δ-N D-5 (04-1)	IV	(4.4)	(1.2)	0.1	061	板目	上下両端折れ。右 端剥離。			粗い				
119	δ-N C-3-4 (04-1)	IV	(4.9)	1.3	0.2	019	板目	下端折れ。	上部中央に小さな穿孔有 り。		滑らか				
120	δ-N E-1 (04-1)	IV	(22.4)	4.1	0.3	061	板目	上下両端折れ。			滑らか	118820.531	89803.055	3.859	
121	δ-N C-5 (05-2)	IV	(12.8)	(2.3)	0.2	061	板目	下端折れ。右端剥 離。	左端下部に切り込み有り。 人形に埋めしたもののか。		滑らか	118811.808	89832.006	3.569	流れに平行。文字の書 き出しは東側から。文 字面が下向き。
122	δ-N E-8 (05-2)	IV	(10.8)	(1.6)	0.3	081	板目	上下両端折れ。右 端剥離。	中央部で平歛。		滑らか	118820.8	89836.574	3.836	流れに平行。文字の書 き出しは北西側から。 3.79 文字面が下向き。
123	δ-N D-7 (05-2)	N	(31.5)	3.9	0.2	061	板目	上端折れ。	薄い板が細かく割れたも の。		滑らか	118816.535	89834.388	3.445	流れに平行。文字面が 下向き。
124	δ-N E-7 (05-2)	N	3.7	(33.7)	0.5	061	板目	一端折れ。	複数木綿の縫合を二次的に 变形し、尖らせがる。先端は 折れたもの。		滑らか	118822.759	89834.207	3.797	流れに平行。上端が四 角。表が下向き。
125	δ-N F-6 (05-2)	N	(9.8)	2.2	0.2	019	板目	上端折れ。下端切 断。			滑らか	118827.909	89827.342	3.758	流れに平行。文字の書 き出しは西側から。表 面が下向き。
126	δ-N A-7 (05-2)	N	(5.3)	2.9	0.2	081	板目	上下両端折れ。	ややん書きに穿孔有り。		滑らか	118827.909	89827.259	3.732	
127	δ-N T-12 (06-1)	N	(8.4)	2.2	0.4	019	板目	F端折れ。	上端は山形に彫刻。		滑らか				
128	δ-N T-14 (06-1)	N	(7.1)	(2.0)	0.3	081	板目	上端折れ。左端は 剥離。			やや粗い				
129	δ-N T-14 (06-1)	N	(7.1)	(1.1)	0.3	081	板目	下端切削。左端剥 離。	端を宝珠形に尖らせて、 切り込みを入れたもの。		滑らか				
130	δ-N T-14 (06-1)	N	(13.2)	2.0	0.3	081	板目	上下両端折れ。			滑らか				
131	δ-III D-20 (04-1)	V	(20.6)	(4.9)	0.4	081	板目	下端折れ。右端剥 離。1片が接着する。	接合した上片。		滑らか	118819.018	89798.416	3.679	2片が折り重なった状 態で出土。上片の表側 が上向きになり、その 上に下片の裏面が上向 きで重なって出土。
132	δ-N D-4 (04-1)	V	(13.7)	2.0	0.3	081	板目	下端有り。左端は二 次的に彫刻。	接合した下片。左端下端は 次にややく剥り出されて いる。		滑らか	118819.019	89798.312	3.704	
133	δ-N E-4 (04-1)	V	19.5	(3.6)	0.3	011	板目	上端一部欠損。ド ド端二次的折れ。左 端剥離。	上端に穿孔有り。左端を二 次的に彫刻した形。や やく剥りに位置する。		滑らか	118819.079	89798.389	3.704	
134	δ-N F-4 (04-1)	V	(10.7)	1.7	0.4	019	板目	下端折れ。左端下 端は欠損。	大型の文書木綿の断片か。		滑らか	118813.026	89798.315	3.711	
135	δ-N D-1 (04-1)	V	(11.8)	2.3	0.4	019	板目	下端折れ。中央で 2辺に分かれで出 す。	複合した上片。		滑らか	118817.818	89802.906	3.488	流れに直立。文字の書 き出しは北東側から。 文字面が上向きで出 土。
136	δ-N F-3 (04-1)	V	(11.4)	1.8	0.4	069	板目	上端折れ。	複合した下片。		滑らか	118817.826	89802.938	3.638	流れにはほぼ平行。文 字の書き出しは西側か ら。文字面が下向き。
137	δ-N E-5 (04-1)	V	(20.0)	(3.8)	0.3	081	板目	上端折れ。左端剥 離。	長大な文書木綿の東尾の所 片か。		やや滑らか	118821.127	89820.978	3.553	
138	δ-III D-20 (04-1)	V	(7.7)	1.4	0.3	059	板目	下端折れ。	下端を左端側からの削 りで尖らせる。		粗い	118818.842	89797.317	3.537	文字面が下向き。
139	δ-III H-19 (04-2)	V	(12.3)	1.9	0.5	065	板目	上端折れ。	左端下端は水滴的形。		やや粗い	118827.945	89791.302	3.8578	
140	δ-N D-2 (04-1)	V	(6.4)	1.7	0.1	081	板目	下端折れ。	上端は山形。		やや粗い	118817.454	89807.147	3.414	流れにはほぼ平行。文 字の書き出しは西側か ら。文字面が下向き。

番号	グリッドなど (調査区)	層位	法量 L (cm)	法量 W (cm)	法量 H (cm)	型式	木取 り	備考1 (残存部分 に関する情報)	備考2 (形状に関する情報)	表面の状態	X	Y	Z	出土状況
141	8-N F-4 (04-1)	V	12.0	2.1	0.4	032	板目	完形。	上部に切り込み有り。	滑らか	118828.654	89815.258	3.485	流れに平行。文字の書 き出しには墨跡から。文 字面が上向き。
142	8-N D-5 (04-1)	V	(10.6)	2.0	0.2	081	板目	上F両端折れ。		粗い	118814.212	89821.305	3.183	流れに平行。文字面が 上向き。
143	8-N E-4 (05-1)	V	11.2	2.0	0.5	011	板目	完形。		滑らか	118820.599	89815.029	3.271	
144	8-N E-2 (04-1)	V	(9.7)	1.7	0.4	032	板目	下端折れ。	上部に切り込み有り。	やや滑らか	118825.669	89798.049	3.834	流れにはほぼ平行。文字 の書き出しは南西側から。 正面が上向き。
145	8-N C-20 (04-1)	V	13.6	2.9	0.5	032	板目	ほぼ完形。	上部に切り込み有り。	やや粗い	118814.454	89798.028	3.41	
146	8-N C-5 (04-1)	V	(10.4)	2.8	0.4	059	板目	上端折れ。	下端は右端側からの割り で尖らせる。	滑らか	118812.88	89819.637	3.191	
147	8-N S-T-15, 16 (05-8-2)	V	(8.0)	0.9	0.5	039	板目	下端折れ。	細い棒状で上部に小さな切 り込み有り。	滑らか				
148	8-N D-12 (05-1)	V	(10.2)	1.6	0.2	081	板目	上端折れ。	下端は尖っていたものを平 坦に削る。	粗い	118815.66	89853.026	3.71	流れに直角。文字の書 き出しは北西側から。文 字面が上向き。
149	8-N C-12 (05-1)	V	(12.2)	1.5	0.3	031	板目	中央で折れている が、ほぼ完形。	両端にV字形の切り込み有 り。阿波國の匂に特徴的な ものが。	滑らか	118814.214	89853.592	3.555	流れに平行。
150	8-N C-10 (05-1)	V	(17.4)	2.4	0.5	049	板目	上端折れ。	下端は「氷の彫刻」で鋭く、 削り模様を呈する。	上部表面が 下に削り取 る。	118812.699	89849.001	3.531	流れに平行。文字の書 き出しは南西側から。 文字面が上向き。
151	8-N C-10 (05-1)	V	32.5	(2.2)	0.7	081	板目	左端削れ。右端の 下1/3が削れ。	厚みがある板に蓄積。	滑らか	118813.843	89850.14	3.438	流れにはほぼ平行。文字 の書き出しは西側から。 正面が上向き。
152	8-N C-10 (05-1)	V	(8.7)	(2.2)	0.4	081	板目	上端折れ。左右両 端削れ。	左辺下端に切り込み有り。 木端と底端不規則な木製品に 内加工したもの。	粗い	118813.571	89848.462	3.456	流れに平行。文字の書 き出しは北西側から。 文字面が上向き。
153	8-N C-10 (05-1)	V	(11.5)	2.5	0.7	019	板目	下端折れ。	比較的厚手で、断面形が凸 レンズ状を呈する。	滑らか	118811.396	89848.184	3.43	流れにはほぼ直角。右端 に削り取 る。
154	8-N C-10 (05-1)	V	16.6	1.5	0.4	051	板目	完形。	上端は両角を削って底辺に 参考。下端は左右両端から の削りで尖らせる。	長合東黒塗 り	118811.599	89849.019	3.46	流れにはほぼ平行。文字 の書き出しは西側から。 正面が上向き。
155	8-N A-10 (05-1)	V	(9.3)	2.6	0.7	061	板目	輪郭折れ。	腰接縫の閉鎖部分。	滑らか	118803.106	89849.293	3.532	
156	8-N I'-9 (05-1) ①	V	(8.6)	1.6	0.5	019	板目	上端は切断。中間 に欠損部分が多 い。		滑らか	118827.23	89840.847	3.673	流れには直角。文字面が 上向き。
156	8-N F-9 (05-1) ②	V	(8.0)	1.6	0.5	019	板目	上端と下端折れ。		滑らか	118827.235	89840.932	3.685	
157	8-N E-10 (05-1)	V	(9.8)	(0.5)	0.6	081	板目	左右端削れ。	断面形状は、文字面よりも 裏面の方が広い長方形を呈 する。	滑らか	118824.925	89845.994	3.554	流れに直角。文字の書 き出しは北西側から。書 き出しは南側から。
158	8-N C-10 (05-1)	V	9.9	2.5	0.3	051	板目	上端折れ。	上端は左の角を削り、下端 は左端削離からの削りで尖 らせる。	粗い	118830.144	89844.706	3.803	流れに直角。文字の書 き出しは北側から。文 字面が上向き。
159	8-N D-9 (05-1)	V	(7.3)	(1.4)	0.4	081	板目	下端折れ。右端削 離。		滑らか	118818.699	89843.412	3.742	流れに直角。文字の書 き出しは南側から。文 字面が上向き。
160	8-N E-9 (05-1)	V	8.1	0.7	0.6	011	板目	完形。	断面形状が正方形を呈す る。無本か。	滑らか	118818.973	89843.368	3.75	
161	8-N F-11 (05-1)	V	14.1	1.9	0.3	051	板目	完形。	上端は強烈に整形。下端は 左端削離からの削りにより 尖らせる。	粗い	118829.962	89853.243	3.625	流れに直角。文字の書 き出しは北西側から。 文字面が上向き。
162	8-N D-11 (05-1)	V	(11.9)	(1.1)	0.1	081	板目	下端折れ。		滑らか	118830.066	89853.273	3.687	流れに直角。文字の書 き出しは北西側から。 文字面が上向き。
163	8-N G-8 (05-1)	V	(5.4)	1.5	0.3	011	板目	上端切削、下端折 れ。		滑らか	118819.934	89852.874	3.838	流れに直角。文字の書 き出しは北西側から。 文字面が上向き。
164	8-N B-10 (05-1)	V	8.0	0.6	0.5	011	板目	上下両端切削。	断面形状が正方形を呈す る。	滑らか	118820.974	89852.765	3.855	流れに直角。文字の書 き出しは北西側から。 文字面が上向き。
165	8-N B-11 (05-1)	V	(7.3)	1.4	0.3	081	板目	上下両端折れ。	左右両端は削りで垂れ取り を施す。	やや粗い	118833.883	89838.283	3.838	流れに直角。文字の書 き出しは北西側から。 文字面が下向き。

標号	グリッドなど (調査区)	部位	法量 L (cm)	法量 W (cm)	法量 H (cm)	型式	木取	備考 1 (現存部分 に関する情報)	備考 2 (形状に関する情報)	表面の状態	X	Y	Z	出土状況
166	δ-N E-9 (05-1)	V	(14.6)	0.5	0.7	081	板目	上下両端折れ。	断面形状は、文字面よりも裏面の方が広い方形状を呈する。	滑らか				
167	δ-N F-9 (05-1)	V	(9.1)	0.5	0.7	081	板目	上端切削、下端折れ。	左右両辺が削裁され、両面形状が正方形を呈する。	滑らか				
168	δ-N F-9 (05-1)	V	(11.3)	(1.1)	0.2	011	板目	F端折れ、右辺折れ。		滑らか				
169	δ-N A-9 (05-2)	V	(14.7)	(1.6)	0.6	081	板目	上端切削、左両端 邊は削裁。		やや粗い	118804.253	89811.213	3.451	流れにはびく文。
170	δ-N B-9 (05-2)	V	(23.1)	1.5	0.3	081	板目	上下両端折れ、左 辺下半分削れ。		やや粗い	118806.49	89842.113	3.533	
										118806.609	89841.97	3.528	流れに平行。文字面が下向き。	
										118806.546	89842.233	3.534		
171	δ-N D-8 (05-2)	V	(6.0)	1.8	0.4	081	板目	上下両端折れ。		滑らか	118817.652	89839.567	3.363	流れに底交。文字の書き出しは南北から。文字面が上向き。
172	δ-N E-7 (05-2)	V	(12.3)	2.5	0.3	051	板目	下端折れ。	上端は切り折り後に削り、右辺下部に丸り有り。	滑らか	118824.062	89834.062	3.696	
										118824.091	89834.17	3.647	流れに平行。文字面が上向き。	
173	δ-N C-8 (05-2)	V	(17.0)	1.7	0.2	081	板目	ほぼ完形。	上端両端とも、右辺から削り出でて尖らせせる。	やや粗い	118814.815	89835.528	3.4	流れに平行。文字の書き出しは南北から。文字面が上向き。
174	δ-N B-6 (05-2)	V	(26.5)	3.7	0.6	051	板目	完形。	下端は左辺から削り出でて尖らせせる。右辺から大きく削られる。	やや粗い	118807.837	89830.869	3.413	流れに平行。文字の書き出しは南北から。文字面が下向き。
175	δ-N G-6 (05-2)	V	(17.2)	1.7	0.5	051	板目	完形。	上部に切り込みの残在有り、二次的に彫形か。下端は尖らせる。	滑らか	118831.858	89826.059	3.66	流れにはびく文。文字の書き出しは南北から。文字面が下向き。
176	δ-N C-7 (05-2)	V	(3.5)	3.2	0.2	011	板目	完形。	木彫を二次的に彫形し、正方形にしたもの。	やや粗い	118812.527	89829.916	3.233	流れに平行。西側を削りにして、斜めに突き刺された状態です。文字の書き出しは南北から。文字面が底向き。
177	δ-N F-6 (05-2)	V	(17.3)	2.2	0.3	051	板目	ほぼ完形。	ほとんど削りのない断面二角形の状態。下端は尖らせる。	粗い	118826.376	89824.925	3.422	流れに平行。北西側を削りにして斜めに突き刺された状態です。文字の書き出しは南北から。文字面が底向き。
178	δ-N D-7 (05-2)	V	(24.0)	4.4	0.2	019	板目	下端折れ。	表面の整形が粗いため書が跡む。	やや粗い	118817.439	89833.067	3.373	流れに平行。文字の書き出しは東西から。表
										118817.531	89833.386	3.455	面が下向き。	
179	δ-N F-5 (05-2)	V	(15.6)	2.4	0.9	039	板目	上下両端折れ。	上端に切り込みの痕跡有り。	粗い	118826.675	89821.885	3.461	流れに平行。文字の書き出しは南北から。文字面が上向き。
180	δ-N D-7 (05-2)	V	(6.7)	(1.6)	0.1	081	板目	上下両端折れ、左 辺折れ。		やや粗い	118826.636	89822.037	3.457	流れに平行。北西側を削りにして斜めに突き刺された状態です。文字の書き出しは南北から。文字面が上向き。
181	δ-N D-7 (05-1)	V	(9.0)	1.9	0.4	039	板目	下端折れ。	上部に切り込み有り。	滑らか				
182	δ-III Q-20 (00-1) 2	V	(22.0)	3.3	0.3	051	板目	完形。	上端両端とも右西側からの削りによって出形を呈す。次の整形の可能性あり。	滑らか				
183	δ-N H-1 (00-1)	V	(26.2)	5.2	0.5	011	板目	上端の大手欠損。	長方形の文書大欄。	やや滑らか	118835.390	89809.630	3.266	流れにはびく文。
184	δ-N H-3 (00-1)	V	(16.8)	1.5	0.2	051	板目	上端切削。	下端は右両側からの削りにより疊く尖らせせる。	滑らか	118835.395	89814.165	3.378	流れに平行。文字の書き出しは南北から。
185	δ-N G-1 (00-1)	V	(7.6)	1.5	0.2	011	板目	下端切削。	上端は左右側からの削りによって山形を呈する。	滑らか	118830.893	89801.645	3.597	流れに平行。文字の書き出しは南北から。文字面が上向き。
186	δ-N G-3 (00-1)	V	(14.9)	1.5	0.2	061	板目	上端切削か。	下端は左右両側からの削りで尖らせる。	滑らか	118831.920	89811.295	3.343	流れにはびく文。文字の書き出しは南北から。文字面が上向き。
187	δ-N G-3 (00-1)	V	(17.8)	2.3	0.3	031	板目	下端折れ。	上端は山形を呈し、切り込み有り。左辺下部に切り込みの痕跡が残る。	滑らか	118834.970	89811.325	3.267	流れにはびく文。文字の書き出しは南北から。文字面が下向き。
188	δ-N G-3 (00-1)	V	(13.8)	2.2	0.2	019	板目	下端折れ。	上端は桟をもつ山形に變形。	やや粗い	118834.712	89813.845	3.347	流れにはびく文。文字の書き出しは南北から。文字面が下向き。
189	δ-III G-19 (00-1)	V	(15.1)	(0.9)	0.5	081	板目	上端折れ。左右両辺は削裁。		滑らか	118830.136	89794.922	3.398	流れにはびく文。
										118830.022	89794.975	3.422		

大 量	グリッドなど (調査区)	層位	法量 L (cm)	法量 W (cm)	法量 H (cm)	型式	木取	備考 1 (発存部分 に関する情報)	備考 2 (形状に関する情報)	表面の状態	X	Y	Z	出土状況
											X	Y	Z	
190	8-N G-3 (00-1)	V	12.5	2.4	0.5	032	板口	完形。	上端は切削後に安樂開閉か ら留め、底面川字状を呈す。 下端は切り折り。上部 に切り込み有り。	滑らか	118831.170	89610.605	3.360	流れに直交。文字の書 き出しは南西側から。
191	9-M G-19 (00-1)	V	9.8	2.3	0.4	032	板口	ほぼ完形。	上部に切り込み有り。台形 状を呈し、両底の質の軟 硬を示す。	滑らか	118830.760	89794.110	3.309	流れに直交。文字の書 き出しは南西側から。
192	(00-1)	V	24.5	2.2	0.7	011	板口	上・下火縫切削。		やや粗い				
193	9-M G-20 (00-1)	V	(5.7)	1.7	0.3	019	板口	上端切削、下端折 れ。		滑らか	118833.359	89799.653	3.112	
194	8-N C-1 (00-1)	V	7.6	1.6	0.6	032	板口	完形。	上端は切り折りによる切 断。上部に切り込み有り。	滑らか	118830.871	89646.271	3.242	
195	8-M C-19 (00-1)	V	6.5	(1.3)	0.4	031	板口	下端切削、左端折 れ。		滑らか	118830.943	89794.943	3.020	
196	8-N G-3 (00-1)	V	(11.9)	(1.6)	0.3	081	板口	上端折れ、右辺倒 れ。	D端は二次的膨形か。	滑らか	118832.809	89811.036	3.685	
197	(00-1)	V	(3.5)	(0.7)	0.1	081	板口	上・下火縫折れ、H 倒れ。		滑らか				
198	8-N G-10 (05-1)	V	(6.3)	1.9	0.2	081	板口	上・下両端折れ。		やや粗い	118832.981	89846.686	3.266	
199	8-N C-10 (05-1)	V	(10.8)	1.9	0.2	081	板口	上・下端折れ。		滑らか	118833.577	89848.473	3.331	流れに平行。文字の書 き出しは北西側から。 文字面が上向き。
200	8-N P-5 (05-2)	V	(15.3)	2.8	0.3	019	板口	下端折れ。	上端は穂のある直角。左端 下部は斜めに削る。	粗い	118829.11	89622.009	3.037	流れに直交。北から南 へ斜めに削られた状態。 文字の書き出しは北東側 から。文字面が上向き。
201	8-N C-10 (05-1)	V	57.9	(5.0)	0.5	081	板口	右辺は割り。	上・下両端とも、右辺に向 かって曲線状に彎がる。断 面は左端が高く、右辺は厚 い。	滑らか	118834.087	89817.882	3.55	
202	8-N P-7 (05-2)	V	(21.6)	5.1	0.5	019	板口	上端折れ。	下部中央に穿孔有り。	両面に削り 痕跡有り	118830.037	89831.053	3.053	流れに平行。文字の書 き出しは直角から。表 面が下向き。
203	8-N E-7 (05-2)	V	(22.6)	3.3	0.3	039	板口	下端折れ。	上部に切り込みと穿孔有 り。右辺下部に斜めに削る 痕跡有り。	滑らか	118821.382	89830.364	3.061	流れに平行。「く」の 字に削れた状態で出 ます。文字の書き出しは 南東側から。文字面が 下向き。
204	8-N F-4 (04-1)	V	(7.7)	2.2	0.3	081	板口	上・下内縫折れ。		滑らか				
205	8-N G-4 (00-1)	V	(12.4)	1.4	0.4	019	板口	下端折れ。	自然乾燥。	やや滑らか				L=3.108~2.962m.
206	8-N P-16 (08-1)	V	(4.0)	2.0	0.2	019	板口	下端折れ。	上端は左右両側からの削り によって山形を呈する。	やや粗い				
207	8-N T-13 (08-1)	V	(12.4)	(2.4)	0.5	081	板口	上・下内縫折れ、右 辺倒れ。	裏面に削痕し、左辺から右 辺にかけて薄く、削痕を呈す。 左端は削り落す。	滑らか				
208	8-N P-16 (08-1)	V	16.9	1.6	0.3	081	板口	上端折れ。	上下両端とも左端から削 て尖らせる。	やや粗い				
209	8-N T-16 (08-1)	V	(11.2)	2.3	0.4	050	板口	上端折れ。	下端は左端から削って 尖らせる。	粗い				
210	8-N P-10 (05-1)	V	8.1	0.5	0.4	011	板口	光形。	裏面形状が正方形を呈す る。算木か。	滑らか				
211	8-N N-1 (00-1-2)	DK	13.8	2.1	0.4	031	板口	左端下部欠損。	上下両端に切り込み有り。	やや粗い	118867.050	89802.835	1.567	流れに直交。文字の書 き出しは南西側から。 文字面が下向き。
212	8-E O-10 (01-2)	DK	11.5	2.6	0.3	032	板口	完形。	上部に切り込み有り。小筒 の幅1/3程度の隙さ。	滑らか	118973.803	89746.379	2.382	SR4001
213	8-E O-10 (01-2)	DK	(15.1)	2.3	0.4	065	板口	下端折れ。		やや滑らか	118973.677	89747.294	2.39	SR4001
214	8-M N-12 (01-2)	DK	(16.4)	2.0	0.5	019	板口	下端折れ。	上端に切り込みの痕跡有 り。	やや滑らか	118968.752	89757.659	2.863	SR4001
215	8-E P-10 (01-1)	DK	12.6	2.6	0.4	032	板口	下端折れ。	上端に切り込みの痕跡有 り。	やや滑らか	118977.104	89746.744	2.313	SK5001

表25 その他

番号	グリッドなど	層位	法量 L (cm)	法量 W (cm)	法量 H (cm)	木取	備考1 (残存部分 に関する情報)	備考2 (形状に関する情報)	表面の状態	X 座標	Y 座標	Z 座標
										X 座標	Y 座標	Z 座標
1	δ-N D-8 (05-2)	III	(11.0)	1.9	0.3	板目	上邊折れ。	竹籠の要用穿孔有り。	滑らか	118617.952	89833.425	3.95
										118617.996	89835.531	4.000
2	δ-N D-8 (05-2)	III	(3.5)	1.3	0.2	板目	上下両端折れ。	椎骨の断片。	滑らか	118818.61	89835.272	4.039
3	δ-N D-8 (05-2)	III	(12.9)	1.8	0.2	板目	上邊折れ。	竹籠の要用穿孔有り。	滑らか	118818.471	89834.915	4.031
4	δ-N F-5 (05-2)	IV	(29.4)	3.2	0.4	板目	上邊折れ。	竹籠の要用穿孔有り。	滑らか	118827.932	89823.829	3.843
										118827.836	89824.097	3.851
5	δ-N T-14 (98-1)	IV	(10.8)	1.7	0.4	板目	下邊折れ。	上部に切り込み有り。	粗い			
6	δ-N E-3 (04-1)	V	17.4	1.6	0.4	板目	ほぼ完形。	上下両端切り込み有り。	滑らか	118630.549	89813.921	3.531
										118620.413	89813.876	3.442
7	δ-N D-10 (05-1)	V	(20.9)	2.5	0.6	板目	下邊折れ。	上端は右両側からの削り により山形に變形。	両面に 削り痕	118619.311	89845.399	3.806
										118619.466	89845.249	3.821
8	δ-N F-10 (05-1)	V	(10.3)	2.1	0.6	板目	完形。		滑らか	118628.133	89848.305	3.459
										118628.236	89848.324	3.415
9	δ-N F-10 (05-1)	V	8.8	1.9	0.3	板目	右端下部欠損。		片面は粗い	118629.073	89844.462	3.463
										118629.094	89844.552	3.471
10	δ-N C-11 (05-1)	VI	32.6	3.1	0.9	板目	ほぼ完形。	上下両端切り込み有り。	やや粗い	118610.826	89851.068	3.283
										118611.112	89850.903	3.288
11	δ-N C-10 (05-1)	VI	(7.5)	2.1	0.5	板目	越部折れ。	籠縁の籠縁部分。	やや滑らか			
12	δ-B O-10 (01-2)	VI	15.5	2.3	0.7	板目	ほぼ完形。	上下両端切り込み有り。	やや粗い	118627.991	89746.585	2.718

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第71集

観音寺遺跡(IV)

道路改築事業(徳島環状線国府工区)関連埋蔵文化財発掘調査報告書
《第3分冊 木簡編》

発行日 平成20(2008)年3月25日

編集 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒779-0108 徳島県板野郡板野町大伏字平山86番2
TEL (088) 672-4545 FAX (088) 672-4550

発行 徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社教育出版センター

力被余月某月牒備國依牒右仰當郡司与使役
者使發遣如前仍注事狀付使綿麻呂故牒

之軍所持牒右云藉欲附出京戸籍者國依解狀覆檢知實仍錄事狀故移
中都運使會奉之大宅年貳拾陸年正月廿三日
某陽月某日之入來

（保存處理後）

「阿波國司牒」
〔淡路國カ〕

□□□□□

牒
右被今月廿三日牒備國依牒旨仰當郡司与使人共依數乞徵已畢者
今□□□
方
令向
□使發遣如前仍注事狀付使綿麻呂故牒

〔充カ〕

「已畢望請除此土籍欲附出京戸籍者國依解狀覆檢知實仍錄事狀故移
即附佐伯費大長
彼」

「阿波國司解」
申勘籍資人事秦人マ大宅年貳拾陸
部下名方郡殖栗鄉戸主秦人マ人麻呂戸口者